



国際体験実習

ベトナム・ラオス旅行報告書

2024.3.5-3.16

はじめに

国際理解教育選修 森 朋也

山口大学教育学部国際理解教育では、1998年から海外での実習を目的とした講義「国際体験実習」を隔年で開講してきました。第13回を迎える今回は、2024年3月5日から3月16日までの12日間、ベトナムのハノイとラオスのビエンチャンでの研修となりました。

本研修の目的は、一つに現地での異文化理解のワークショップや授業実践を通して、グローバル化の時代に求められる教員の資質・能力を育むことです。実際の研修では、現地の学校での授業実践、同世代の学生との異文化理解のワークショップの開催を学生とともに企画しました。学生たちは言語的な障壁がある中で教具を工夫したり、ボディーランゲージを使ったりと工夫してコミュニケーションを取っており、初めての海外渡航の学生も多いなかでそれぞれの活動を成功させることができたと思います。

また、両国の歴史や文化について学ぶために、国立歴史博物館や民俗博物館、世界遺産のハロン湾とタンロン王宮遺跡、インドシナ戦争・ベトナム戦争の関連施設であるホアロー収容所やCOPE Visitor Centerに訪問しました。加えて、今回はJICAの事務所に訪問し、さらに開発援助の現場（教育分野）を視察することができました。これらの学習活動を通して、すでに大学の講義で学習した、平和教育、人権教育、開発教育の重要性について理解が深まったと思います。

実は本研修は4年ぶりの開講となります。本来であれば、第13回の研修は2021年度に開講を予定しておりましたが新型コロナウイルスの影響で中止せざるをえませんでした。本実習が再開し、無事に実習を成功させることができたことを大変嬉しく思います。この経験が参加学生の今後の糧となれば幸いです。

国際理解教育選修 セネック アンドリュウ

この度山口大学教育学部の学生24人は、12日間に及ぶ海外での「国際体験実習」を無事終えることができました。多くの学生にとって今回が初の海外渡航であり、特に研修先であるベトナムとラオスは学生全員にとって未知の国でした。研修前の学生たちは「現地でコミュニケーションがうまくできるだろうか」と不安を抱えているようでしたが、現地で学生たちは、教員が驚くほど自ら積極的にコミュニケーションのチャンスを作り、それぞれの活動で成果を上げていました。

事前研修の時にベトナム語とラオス語の挨拶を覚えた程度で、現地の子どもたちとの活動は非言語的コミュニケーションが前提でした。その条件でどのような活動を展開していくか、学生たちは創意工夫をこらした様々な計画を立てていました。現地ではその場の状況に応じて柔軟に対応し、見事な活動を行っていました。

ベトナムでは現地で一般的な「国際女性デー（男性が女性にプレゼントする習慣）」に合わせ、学生たちはお世話になったガイドの方に花束をプレゼントしていました。ラオスでは30度を超える暑さの中、けん玉や紙ひこうきを使って小学生だけでなくその保護者も一緒に活動を行いました。高校生と大学生とは、ノートでの筆談を通じて会話を発展させ交流を深めていました。お互いがノンネイティブスピーカーの同年代の学生との交流は貴重な経験になったと思います。

学生たちは大学で様々な講義を受けてきました。これまで習得してきたそれらの知識・技能が、海外での実践を通じより深まったと嬉しく思っております。学びにおいて実際の体験に勝るものはありません。今回のこの経験が、これからのグローバル化時代を生きていく学生皆さんの力となってくれることを願っています。

謝辞

この度の研修では多くの方々のご支援の下で実施することができました。この場を借りて御礼申し上げます。

まず、本研究の実施にあたり、山口大学基金支援事業 国際交流・海外学術交流等支援事、山口大学海外留学支援制度「はばたこう！山口から世界へ」、学外教育実践支援プロジェクト経費、と学内からの財政的な支援を賜りました。これらの支援のおかげで、現地で充実した研修を実施することができました。

つぎに、現地の受け入れ機関、また現地の調整を進めていただいた方々にも御礼申し上げます。ベトナムにおいては、ハノイ経営工科大学 (Hanoi University of Business and Technology) の Thanh Thuy Nguyen 氏、貿易大学 (Foreign Trade University) の Nguyen Hoai 氏に現地の宿泊先やバスなどの手配、現地のガイド、訪問先の紹介や日程調整などをご協力いただきました。お二方がいなければ、ベトナムでの本研修を実施することは不可能だったと思います。また、ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学 (Vietnam National University, Hanoi, University of Social Sciences and Humanities) 東洋日本研究学科の Vo Minh Vu 氏、Nguyen Phuong Thuy 氏にはワークショップを快く引き受けていただきありがとうございました。加えて、授業実践とワークショップを開催させていただいた、ベトナム日本国際学校、Le Loi 中学校、RIKI 日本語学校につきましても感謝申し上げます。みなさまが暖かく迎え入れていただいたおかげで、後半のラオスでの活動も成功させることができたと思います。

ラオスにおいては、Blooming Tour 社の曾澤氏にはバスやレストランの調整、また学生への細かな配慮、とりわけ健康面でのお気遣いをいただきました。また、ラオス税務局の Canda Sinpaseuth 氏、ラオス国立大学の Viseuy Indavong 氏にも多くの面で支援していただきました。加えて、現地では、JICA ヴィエンチャン事務所、ドンカムサン教員養成学校と成田協力隊員、ラオス日本センター、ピアワット中学校、ノンボン中学校において、我々の訪問を快諾していただき、授業やワークショップの活動を実施することができました。

最後に、教育学部の鷹岡亮学部長、教務係、予算管理係、総務企画部の皆様には、提出書類や手続きの面で多大な迷惑をお掛けいたしました。年度末の中でご多忙にもかかわらず、本研修にご協力いただきまして誠にありがとうございます。また、参加した学生の親御様、他選修・コースの主任の先生方には、本研修の意義についてご理解頂き、学生の背中を押していただいたことを感謝申し上げます。

この他にも多くの人びとに支えていただき、本研修を実施できました。改めまして、御礼申し上げます。今後とも本研修をご支援いただければ幸いです。

国際理解教育選修一同

ベトナム（3月5日－3月10日）





ラオス（3月10日-3月15日）





目次

はじめに

謝辞

研修日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ |

教育・文化・言語・民族で学んだこと・・・・・・・・・・・・ 2

授業について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

ワークショップについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

個人研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

日記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

研修日程

12日間(3月5日～3月16日)

日程	内容
5日(火)	出国 福岡空港→ハノイ・ノイバイ空港から入国
6日(水)	ハロン湾(UNESCO 世界遺産)の見学
7日(木)	ベトナム日本国際学校で授業・交流会 歴史博物館、ホアンキム湖の見学
8日(金)	Le Loi 中学校での交流会 ベトナム国家大学でのワークショップ ホアロー捕虜収容施設の見学
9日(土)	文廟とタンロン王宮遺跡(UNESCO 世界遺産)の見学 RIKI 日本語センターでのワークショップ・セネック先生と吉武君のプレゼン 民俗博物館の見学
10日(日)	ハノイ出国→ワットタイ国際空港からラオスへ入国 COPE Visitor センター見学
11日(月)	ラオス日本センター・ラオス国立大学とワークショップ・セネック先生と吉武君のプレゼン ホアイホン女性職業訓練所、国立歴史博物館の見学
12日(火)	ドンカムサン教員養成学校(国立大学の附属学校)での参観(算数の授業) JICA ビエンチャン事務所の訪問
13日(水)	ビエンチャン市内のピアワット中学校、ノンボン中学校で授業 タラートサオで買い物
14日(木)	ビエンチャン市サントン郡ナポ村の小学校で授業
15日(金)	タートルアン寺院、パトゥサイの見学 自由行動 ワットタイ空港・ラオス発→ハノイ着
16日(土)	日本に帰国(機内泊) ハノイ発→福岡国際空港着

教育・文化・民族・言語で学んだこと

○教育

ベトナムの教育

保育学校、幼稚園	
義務教育	幼稚園 (5～6歳)
	1年生 (6～7歳)
	2年生 (7～8歳)
	3年生 (8～9歳)
	4年生 (9～10歳)
	5年生 (10～11歳)
	6年生 (11～12歳)
	7年生 (12～13歳)
	8年生 (13～14歳)
上級中等学校(10～12年生)	
ジュニア・カレッジ、大学等	

○義務教育について

ベトナムの義務教育は、就学前の5歳児教育と初等学校の5年間と下級中等学校の4年間を含む10年間となる。2019年教育法より初等学校は強制教育と定められた。2021年の初等教育の純就学率は、97.7%であり、高いと言える。

出所: JICA(2024.4.9)「ベトナムの教育制度【外国につながる児童の教育に携わるみなさまへのお役立ち情報】」

○学校教育費

- ・ 憲法により公立小学校は無償とされている。但し、JICA(2024)によれば、公立小学校でも学費は有償である。日本とは異なり、中等教育以降は学費の納入が必要であるが、低収入家庭、少数民族、遠距離通が必要な子どもなどの場合、学費が免除されることがある。また、公立学校でも制服や教科書等の購入が必要である。
- ・ 子ども一人当たりの平均教育費は居住地域による差が大きい。2020年、都市部の子ども一人当たり教育費は、農村部の約2.2倍であり、都市部の子どもは塾などに通っていると考えられる。

○小学校での教育について

- ・ 小学校ではベトナム語、算数、第一外国語(英語)、道徳、自然と社会、歴史と地理、理科、情報教育、体育、芸術、体験活動の科目が扱われる。ベトナムの教育訓練省は、特に英語と情報教育を重要分野としている。第一外国語(英語)と情報技術は、小学校3年生から必修教科である。1、2年生は、第一外国語(英語)を選択教科として履修できる。また、ベトナム語以外の「民族言語」を選択教科として履修できる。体験活動は、異なる教科の知識やスキルを統合することで、これまでに得られた体験を新たな知識やスキルに転換し、創造性や生活への適応能力を育むことを目的とした合科的な学習である。日本でいう総合的な学習の時間に近い授業であると考えられる。

○評価・進級制度

- ・ 成績の評価は各教科の試験結果、学習態度、出席状況により評価される。学期末、学年末に試験が行われ、合格点に達しない場合は再試験が行われる。一定の基準に達しない児童生徒は、進学・卒業できず、留年となり3年留年すると退学になる。初等教育の留年率は、1%で初等教育最終学年の残存率は96%である。

○ベトナム日本国際学校について

- ・ 今回の訪問したベトナム日本国際学校では、日本の教育課程に基づいた日本国際プログラムがある。日本語の学習はもちろん、台風の日、リレーといった日本式の運動会、着物の試着、茶道など日本の文化を学ぶ機会が多く設けられている。

- ・ ベトナム日本国際学校では、ベトナム日本国際学校の授業を見学した後に、わずかな時間であったが、日本国際プログラムを行っている 2 年生の教室で授業を行うことができた。
- ・ 見学した際に日本人の先生が行っていたいくつかの工夫に気がついた。一つ目は、タイマーを使い、あと何分で休憩が終わるのか視覚的に子どもたちが分かるようにしていた。またタイマーの合図で子ども達が着席する様子が見られたので、児童に時間を守る習慣が身に付いていると感じた。二つ目は、クラスが騒がしい時、静かにしている子、いい姿勢で前を向いている子を褒めていた。そうすることで、注意しなくてもクラス全体が静かになり、良い姿勢で前を向くようになっていた。三つ目は、短い言葉で、分かりやすい日本語で子どもたちに指示していることである。2 年生ということもあり、日本語が理解できない子も多かった。また、ベトナムの先生もいるので、日本語が分からず勉強についていけなくなることはない。

ラオスの教育

義務教育	幼稚園	
	初等学校 (小学校)	1年生 (6～7歳)
		2年生 (7～8歳)
		3年生 (8～9歳)
		4年生 (9～10歳)
		5年生 (10～11歳)
	下級中等学校 (中学校)	6年生 (11～12歳)
		7年生 (12～13歳)
		8年生 (13～14歳)
		9年生 (14～15歳)
	上級中等学校 (高等学校) 10～12年生	
	大学、教員養成カレッジ、技術学校	

○義務教育について

初等教育の 5 年間と前期中等学校の 4 年間は義務教育であり、無償で教育を受けることができる。しかし、退学と留年をする児童生徒が多く、2021 年の純就学率は、初等教育 92.35%、前期中等教育 67.65%、後期中等教育 49.64%であり、義務教育である前期中等教育の就学率も低いレベルに留まっている。前期中等教育とは、下級中等学校で行われる教育のことであり、後期中等教育とは、上級中等学校で行われる教育のことである。このようにラオスの就学率が低いレベルにとどまる理由として考えられていることは、ラオス語を生活言語

としない少数民族がラオス語で授業をうけることや約23%の小学校が 5 年生まで開校されていない不完全校であるという 2 つがあげられている。

出所: JICA (2024.4.9) 「ラオスの教育制度【外国につながる児童の教育に携わるみなさまへのお役立ち情報】」

○学校教育費について

- ・ 教科書は原則無償で配布されるが、特に農村部に教科書が十分にいきわたっていない地域があり複数の児童生徒が教科書を共有している場合もある。
- ・ 保護者は学用品等の費用を負担する必要があり、施設修繕費の負担を求められる場合がある。

○小学校・中学校の教育について

- ・ 小学校で学ぶ教科は、国語(ラオス語)、算数、理科と環境、道徳、芸術と手工芸、音楽、体育、英語(3 年生から)、社会(4 年生から)である。
- ・ 中学校で学ぶ教科は、国語(ラオス語)、算数、理科(物理、化学、生物)、社会(地理、歴史)、ラオス学、外国語、情報通信技術 (ICT) である。また、JICA は算数の教科書等の開発を支援している。
- ・ 外国語は小学校 3 年生から週 2 時間勉強する。中学校では、第一外国語(英語あるいはフランス語)を週 3 時間、第二外国語(第一外国語が英語の場合、フランス語、日本語、中国語、ベトナム語より選択)を週 1～2 時間学習する。このことから、外国語に対して力を入れていることがわかる。しかし、教員不足等の問題で、特に地方においては第二外国語をカリキュラムどおりに行うことが困難な

場合がある。

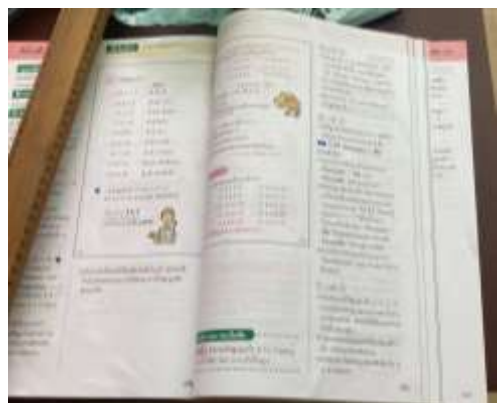
- ・ 課外活動の時間は、ラオスの重要な歴史的・文化的な日を祝う行事、芸術コンテスト、スポーツ活動への参加、教室や校内の掃除などに充てられる。授業時間の 20%を課外活動や非主要教科に充てることが奨励されている。

○評価・進級制度

- ・ 日本とは異なり、出席日数や成績などが進級の基準に達しないと小学生でも留年となる。初等教育の 2014 年の留年率は 6.9%であり、小学 1 年生の留年率は 15.3%と高く、初等教育の中退率は 5.5%である。そのため、初等教育最終学年の残存率は 82%である。
- ・ 進級に必要な学習成果が得られなかった児童生徒に対して、学期中または休業期間に補修が実施される。
- ・ 成績表には各教科の成績、出席状況、指導生徒の行動・態度が記載されていたりと、日本と共通する点がある。

○ラオスでの算数の授業を見て（ドムカムサン養成学校にて）

- ・ 小学校 2 年生の算数の掛け算の授業を見学した。3 の段から 5 の段の掛け算の復習を行う際に、下の写真にもあるようにスケッチブックをめくりながら、掛け算を子どもたちと復習をしていた。非常に効率的な方法であると思った。また、一人ひとりが練習問題に取り組み、そのあと挙手をして答えを黒板に書く場面があった。ある子どもが、答えを間違えてしまった時に、教師が全体にあっているか尋ね、正しい答えが分かる子を前に呼び、間違えた子どもに教えさせていた。教師がすぐに答えを教えるのではなく、子ども同士で学びあう姿勢が素晴らしいと感じた。そして、机間指導も行われており、間違いを教えたり、止まっている子に対しての支援が行われていた。加えて、長い練習問題の文は事前に模造紙に書くという工夫も見られ、時間を有効活用していた。



↑スケッチブックを用いて掛け算の練習をしている様子とラオスの算数の教科書（東京書籍から出版）

（参考文献）

- ・ JICA「ベトナム社会主義共和国 ベトナムの教育制度」https://www.jica.go.jp/domestic/yokohama/information/topics/2024/_icsFiles/afieldfile/2024/04/08/02_vietnam.pdf（最終アクセス 2024 年 7 月 8 日）
- ・ ベトナムスケッチ「日本国際学校」<https://vietnam-sketch.com/20230502105549/>（2024 年 4 月 3 日閲覧）
- ・ JICA「ラオス人民民主共和国 ラオスの教育制度」https://www.jica.go.jp/domestic/yokohama/information/topics/2024/_icsFiles/afieldfile/2024/04/08/08_laos_1.pdf（最終アクセス 2024 年 7 月 8 日）

○文化

この海外研修では、ベトナムとラオスの二か国に滞在した。それぞれ 5 日間、7 日間である。二か国の文化的な側面については、下記の項目に分けて記述する。

【宗教】

- ・ ベトナムでは仏教、カトリック、カオダイ教などが挙げられる。カトリックについては、フランスの植民地であったという歴史的背景から約 1 割程度存在する。
- ・ ラオスは主な宗教として上座部仏教であり、日本の大乘仏教とは異なる。修業をした者のみが悟りを開けるという考えであり、出家した僧による托鉢がある。ラオスの寺院は日本とは全く様子が異なり、非常に豪華で金その他様々な彩色が施されている。

【食】

- ・ フォーやバインミーが有名なベトナムは、食における野菜の割合が非常に多い。どの料理でも大抵、生野菜が提供され、それらを肉や麺と一緒に食べることが多い。野菜は日本ではあまり見ない少し硬めの葉物と、香草、若いソパイヤであった。にんじんは花の形に飾り切るという文化がある。
- ・ 味付けはパクチーなどの香草や香辛料を中心としており、他にもナンプラーや酸味の強いものなど、日本とはかなり異なる。お茶や甘味に、日本ではなじみのない蓮の実を使う。
- ・ ラオスでは、カオニャオという主食がある。ティップカオという竹で編まれた小さな籠にもち米が入っており、手指でこねておかずと一緒に手で食べる。見た目は黒米のようだが、味にクセは特にない。特有の香辛料は特に使っておらず、日本人にも非常になじみやすい味付けだった。また、昔は生肉や動物の血液も食されていたようだが、今ではあまりみられない。

【衣服】

- ・ ベトナムではアオザイという伝統衣装を着ている女性をしばしば見かける。現地の女性にとっては正装であり、格式の高い店に行く際や結婚式などのフォーマルな場面では女性は常にアオザイを着用している。また、教員や学校長など、職種や地位によっても着る機会があるなど、日本の着物ほどフォーマルではなく、スーツと同じような役割を持っていると思われる。
- ・ ラオスでは女性の伝統衣装としてシンと呼ばれる巻きスカートがある。これもアオザイと同様に、フォーマルな場で着られるスーツのような役割を持っているが、日常的にも履かれていた。その他、女性は金のネックレスを着用し、これは金を個人財産の一部として所持するという文化もあるようである。そのため、近年は窃盗などの観点から無くなりつつあるが、以前は幼児にネックレスやピアスを着用させることがあった。

○民族

【ベトナム民族】

- ・ ベトナム最大の民族は「キン族 (Kinh)」または「ベト族 (Viet)」と呼ばれる民族であり、約86%を占めている。キン族の人々は、ベトナムを構成する三つの地域、紅河デルタ、メコンデルタ、中央海岸デルタ(中北部、中南部)に集中している。残りの約14%は53の少数民族で構成されている。少数民族であるが、100万人近い人口を抱えている民族もある。一方で、数百人足らずの小規模な民族もあり、集団によって人口に差がある。

【ラオス民族】

- ・ ラオ族(全人口の約半数以上)を含む計50民族で構成されている。民族は多種多様だが、ラオスは伝統的に、ラオルム、ラオタイ、ラオトゥン、ラオスンの4つのカテゴリーに分類されていた。しかし、ラオス政府により、言語ごとに3つの民族に再分類された。
- ・ ラオルムは人口の半数以上を占める民族で低地ラオ人とも呼ばれ、メコン川渓谷の肥沃な平野またはメコン川の支流の下に住んでいる。ラオルムの言語がラオスの母国語とされ、信仰する仏教も国の宗教とされている。タイ系の部族ラオタイもラオルムに分類される。ラオトゥンはラオスの北部と南部にある中高度の山腹に住んでおり、山腹ラオ人と呼ばれている。オーストロアジア語を話す。ラオトゥンは他のグループよりも低い水準で生活している。ラオスンは高地ラオ人と呼ばれ、最も標高の高い山岳民族である。19世紀頃にミャンマー(ビルマ)、中国南部、チベットからやってきた移民。最大の部族はモン族で、ヤオ族またはメオ族のことも含める。

参考文献

「ベトナムの民族まとめ」 <https://world-note.com/vietnam-ethnic-groups/> (最終アクセス:2024年7月8日)

「ラオスの文化を知ろう!」 <https://hanashiru.com/laos-culture/> (最終アクセス:2024年7月8日)

○言語

今回の海外研修を言語の観点から考える。

【ベトナム語】

- ・ ベトナムは、多くの民族がすむ多民族国家ではあるが、公用語はベトナム語である。ベトナム語の一般的にいわれる特徴は、通常北部の発音は濁音が多く、南部に行くにつれて発音は柔らかくなるが、文法や単語にそれほど大きな違いはないということがある。私たちが訪れたのは、ハノイ（南部）であったため、濁音が多く、日本語との違いを感じる事が多くあった。私たちが実際に触れたベトナム語については、以下のような言葉である。
 - こんにちは → Xin chào(シンチャオ),
 - ありがとう → Cảm ơn(カムオン)
 - わたし → Tôi (トイ) などが挙げられる。
- ・ これらの言葉から、私が感じたベトナム語の特徴は、2 つある。「チャ、チュ、チョ」の音や、イ段の音が強いということである。実際に、ベトナム語のイの段では、i(y):口を横に引っ張って「い」を発音するという特徴がある。また、文字と文字の間に独特の間があり、この発音の仕方はどこか中国語に似ているような気がした。ベトナム語の由来を調べてみると、約 1000 年間は中国から属国のように支配されていたことで、中国語の影響を強く受けたことが考えられる。しかし、文字はラテン語のアルファベットで表されている。これは、フランスの植民地になっていたことが理由である。フランスに植民地化されていたベトナムでは、フランスのアルファベットの影響を受けたのだ。
- ・ このような特徴はベトナム語だけではなく、英語を話すときにも表れていた。街中で声をかけた人たちが日本国際学校の英語の授業などでこのような特徴を感じる事ができた。日本人が英語を話すときに母音の音が強くなるのと同様、それぞれの国によって、母国語の特徴が英語にも反映されることがよくわかった。

【ラオス語】

- ・ 私たちが実際に触れたラオ語は以下のような言葉である。
 - こんにちは → ສະບາຍ(サバイディ)
 - ありがとう → ຂອບໃຈ(コプチャイ)
 - おいしい → ຄາວ (セープ)
 - 1 ມຸນ ຫນຶ່ງ 2 ソーン ສອງ 3 サーム ສາມ 4 シー ສີ 5 ハー ຫ້າ 6 ホック ຫົກ 7 チェット ຈັດ 8 ເປັດ ແປດ 9 カオ ຄ້າ 10 シップ ສິບ 11 ສິພ ອັດສິບ 12 ສິພ ສ່ວນ ສິບສອງ
- ・ 私がこれらの言葉から感じた印象としては、非常にゆったりしていて、あまり濁音の少ない言語であると思った。強く発音したり、破裂音はあまり感じず、日本の人の話し方に少し似ていると感じた。また、

ハノイ市内のノンボン中学校で自分たちが知りたいラオ語について聞く機会があった。その中で、私が聞いた言葉は、「おすすめのビール屋さんはどこですか」である。これはラオス語で言うと、「ハンビア・ビネナム・メンデューサ」と教えてもらった。この文法構造に着目すると、ハンビア(ビール屋さん)・ビネナム(おすすめの)・メンデューサ(どこですか。)となっていることから、日本語と英語の文法とはまた違う文法であることが分かった。この場合であれば、主語と形容詞の関係が日本と英語とは逆の順番になっていることや、少し日本語の並びに似ているということが分かる。

- ・ このように全く違う言語に触れることで、日本語の特徴が逆に見えてきたり、様々な発音の仕方・文法構造を知ることができた。



授業について

小学校

○テーマ

- ・ 言葉を使ったコミュニケーションが難しい状況では、活動内容を伝達し、大学生と子どもたちとの意思疎通をはかるには、非言語的なアプローチが必要である。今回の活動では、大学生と子どもたちの間に共通言語が存在しなかったために、非言語的なアプローチはどれほど効果があるのかが検討された。

○活動内容

けん玉

折り紙

福笑い

だるまさんが転んだ(ラオスのみ)



○活動の様子

- ・ けん玉では、技の難易度別でレベルを設定した(レベル1 大皿・レベル2 小皿・レベル3 中皿・レベル4 けん先)。まず学生が実際に技をやってみせて、子どもが真似をするという形をとった。大学生からのアドバイスを受け、多くの子どもが大皿を成功させていた。中にはレベル4まで出来ている子どももあり、大いに盛り上がった。
- ・ 折り紙では、紙飛行機を作成した。なるべく簡単に作れるよう選んだため、折り方の説明はスムーズにできた。端を合わせる・折り目に沿って折るなど折り紙特有の繊細な動きに苦戦しつつも、真剣に取り組んでいた。完成した後は友達同士で飛距離を競ったり、色を塗ってオリジナルの紙飛行機にして楽しむ様子が見られた。
- ・ 福笑いでは3種類の顔(だるま・ひょっとこ・ドラえもん)を用意した。ドラえもんの福笑いが3種類の中では最も盛り上がったように思う。他の2種類とは違いお手本の顔が子どもたちに浸透していたためと思われる。
- ・ ラオスの小学校では教室の外へ出て、だるまさんが転んだを行った。オニの役は大学生がしていたが、2回目以降は子どもも一緒になってオニの役をやった。「動いているのがばれないようにオニに近づく」というルールが新鮮であったのか、かなり盛り上がった。



○活動を終えて

- ・ はじめは、子どもたちと大学生の間で言葉が伝わらないことによる戸惑いや緊張が見られた。しかし様々なアクティビティを通して、道具や遊びを介したコミュニケーションが生まれ、両者の緊張はほぐれて笑顔が多く見られるようになったように感じた。言葉だけでなく、モノやゲームを効果的に使うことでコミュニケーションは成立すると感じたと同時に、言葉が通じない不便さも実感した。計画通りとはいかなかった活動もあったが、現地にあるものと環境でできることを日本から来た私たちが伝えたことに意味があったのではないかと研修を通して考えた。

中学校

○活動内容

折り紙(折り鶴)

けん玉

メッセージカードの作成

○活動の設定理由

- ・ 大学生と子どもたちに共通した言語がないため、言葉による意思疎通は困難であった。このことから、言語を極力必要とせず、デモを交えて説明できるものを選択した。また、私たちが帰国後も続けてやってほしいと考えたため、特別な道具がなくてもできる伝統的な遊びを選択した。

○活動の様子

- ・ 初めに、折り紙を用いて折り鶴を作成した。現地の学生に通訳をしていただきながら、担当教員が全員の前で実演しながら折り方を指示した。全体の前で教える際、生徒と同じ紙の大きさでおこなってしまったため、生徒にとって細かい部分まで見ることは難しかったと思われるが、各大学生が3,4人の生徒の近くで丁寧に確認しながら行ったことで、子どもたちは、一人一つの折り鶴を完成させることができていた。折る過程も完成した際も何度も確認しながら行うことで、全員が折り鶴を完成させることができ、たくさんの笑顔が見ることができた。
- ・ 次にけん玉をおこなった。初めに3人の日本人学生がけん玉の「とめけん」を実演した後、実際に現地の生徒たちが行った。大皿、小皿、中皿など様々な難易度の技に挑戦しながら楽しんでいる姿が見られた。特に日本人学生も、現地の生徒も技が成功した時に、ともに喜び合う姿がとても印象的であった。
- ・ 最後に特別支援学校の子どもたちに向けて、メッセージカードを作成した。現地の生徒たちが翻訳機能を用いながら、日本人の学生に日本語の書き方を質問していたり、日本人学生が英語を用いながら積極的に質問したり、例を示したりしながら活発に交流している姿が見られた。各国の食文化や日本に行きたい理由など様々な話で盛り上がりただけでなく、文字や絵などを用いて日本語を学ぶ機会にもつながったと考えられる。最後には多くの学生が生徒たちと写真を撮る姿が見られ、短時間の間で絆が深まった様子が見られた。

○活動を終えて

- ・ 予想した通り、言語による意思疎通は難しかったが、デモを交えることで比較的スムーズに説明することができた。またデモを通して子どもと関わることで、緊張感が緩和し、交流が盛んになった。現地の子どもたちが楽しそうに伝統的な遊びを体験している姿はもちろんうれしかったが、その保護者の方にも非常に好評であった点もさらにうれしかった。

ワークショップについて

【内容1】～ベトナム国家大学、ラオス日本センターにて～

- ・ けん玉(技を得点化し、技に成功したら点数贈呈)
- ・ ボーリング(倒した的の点数の贈呈)
- ・ 輪投げ(的の点数の贈呈)
- ・ 手形アート(手形を付けられた距離ごとの点数を贈呈)
- ・ つり(釣った魚ごとの点数を贈呈)
- ・ 射的(的の点数を贈呈)

5分間隔で各ショップを回ってもらい、点数を集めていくゲームを開催。
点数が高い上位3名にプレゼント(駄菓子詰め合わせ)を贈呈

【内容2】～Riki 日本語センターにて～

- ・ セネック先生の他言語の勉強法
- ・ 吉武君の日本のポップカルチャーのプレゼン



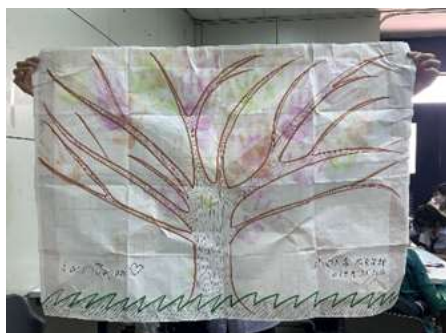
【相手のワークショップ内容】

- ・ ベトナム国家大学
 - ベトナムの伝統的な遊びのプレゼン
 - プレゼン内容の遊びを実際にやってみた
- ・ ラオス日本センター
 - ラオス語のレクチャー



【雰囲気、学生らの反応】

- ・ はじめて会ったのにも関わらず、それを感じさせないくらいゲームに没頭していたようであった。ショップの運営をするどの学生も楽しませようとする前向きな気持ちを感じられた。高得点が取れた時には、自然とハイタッチや拍手をしていて、教室が熱くなるくらい全員が没頭できたワークショップになっていたのではないだろうか。相手の学生らも初めてやるゲームに戸惑いはあったものの、やってみれば高得点を本気で狙いに行き、ゲームを楽しんでいたように見えた。
- ・ 吉武君のプレゼンでは、相手の知らない様々な情報を紹介して、相手の気を引けていたように感じた。私たち日本人でも食いついて見てくれるようなユーモアあふれるプレゼンだった。



【自評】

- このワークショップでは道具を1から自分たちで準備して、それぞれのショップのリーダーを中心に準備を進めてきた。作ったものが壊れないか、きちんと盛り上がるかなど心配はいくつかあったが、3回のワークショップすべて成功と言っていいほど良い雰囲気でも楽しんでいただけたことを嬉しく思う。交流相手の方々は日本語でコミュニケーションをとれたこともあり、みんなが緊張せず、楽しませたいという気持ちでワークショップをおこなっているのを見るととても安心した。
- ラオス日本センターでは通訳のおかげで、全体の指示はとても通りやすかったように思う。言葉が通じない中でも全員がやわらかい表情とスキンシップでコミュニケーションがとれていたのも、雰囲気が良かったことが成功につながったと考える。
- 全員がそれぞれを受け入れ、異文化を知ろうとする姿勢から、言葉を使わないコミュニケーションでつながれたような気がした。相手を受け入れる気持ちや姿勢がコミュニケーションにおいていかに大切かを感じることができた。今回の経験は大変貴重なものであり、なかなか体験できない人生において大切なことを学ぶことができた。関係者の方に感謝し、同時に、人とのつながり方をこれからも大切にしていきたい。



個人研究

1. 研究動機

「JICA」という言葉はよく耳にすることがあるが、実際にどのような目標を掲げ、どのような事業を展開しているのかを知る機会は多くない。そこで、今回の海外研修で訪れるラオスではこれまでにどのような事業が行われてきたのかを知りたいと思い、この研究題目を設定した。

2. 研究内容

(1) JICA の目的

JICA は、開発協力大綱のもとに人間の安全保障と質の高い成長を実現することを目標としている。事業内容は主に6つに分けられる。1つ目は農業や教員養成などを行うために技術やノウハウを伝授するヒト(専門家や研修員)を通じた協力である。2つ目は有償資金協力である。これは橋や鉄道、上下水道設備といった成長の土台となる大規模なインフラ整備を通じた協力である。3つ目は学校や病院といった生活に不可欠な施設の整備費用を贈与する無償資金協力である。4つ目は、民間のリソース(技術・製品)を活用した協力である。日本の中小企業が技術提供や海外進出支援を行うといった民間企業とともに課題解決に向かう協力である。5つ目は、JICA 海外協力隊や NGO 等活動支援といった日本の市民による協力である。6つ目は自然災害や人為的災害の発生現場への援助派遣や物資供与などの緊急時の人道的協力である。

(2) ラオスにおける JICA 事業

外務省はラオス政府が掲げる開発目標の達成を支援するために2019年に「対ラオス人民民主共和国国別開発協力方針」を発表した。その内容は以下の4つに分けられる。1つ目は「財政安定化をはじめとするガバナンス強化および分野横断的な課題への対応」である。ここでは、法の支配発展促進プロジェクトフェーズ2という活動を通して、事実認定と法令の解釈適用を適切に行う能力を身につけた法律実務家が育成されるように支援を施した。2つ目は、「周辺国とのハード・ソフト面の連結性強化」である。ここでは、「ナムグム第一水力発電所拡張計画」を通してダムを建設し、国内の電力供給量を安定化させるとともに隣国のタイにその一部売れるようにするなどの支援を行っている。3つ目は「産業の多角化と競争力強化、そのための産業人材育成」である。ここでは、ラオス国初等科教育における算数指導力強化プロジェクトを通し、初等算数のカリキュラム改訂および教科書・指導書の開発・導入を支援するなどの活動を行っている。4つ目は、「環境・文化保全に配慮した均衡のとれた都市・地方開発を通じた格差是正」である。ここでは、都市環境整備の一環としてルアンパバーンの世界遺産地区と周辺地域において、都市交通に関わる行政機関の計画策定能力および事業実施能力の強化を図り、持続可能な観光都市として発展するための交通施策を考えるなど協力を行った。

3. 海外研修で学んだこと

私はもともと JICA といえば海外協力隊派遣というイメージが強く持っており、事業として具体的にどのようなことを行っているのか知らなかった。今回の JICA ラオス事務所への訪問により大規模なインフラや施設の整備から稲作普及のためのノウハウの伝授まで幅広い協力メニューがあることが分かった。一番印象に残ったのは、初等科算数の教科書開発や指導力を向上させるプロジェクトである。実際に小学校の算数の授業を見学した際にも、ラオスの子どもたちが日本で使われているような教科書や計算カードで勉強している姿を見て、日本の協力が現地でも評価され受け入れられていることを実感した。今回の研修を通して私は国際協力に対して以前より興味を持つようになった。そして JICA の具体的な事業について多くの人に知ってもらうことで、現在支援を必要としている国に対してより積極的な援助が行えるようになるのではないかと考えた。

研究題目「生活や社会から見た日本との環境の違い」

2年 池田海夏人

1. 研究題目及び研究動機

今回の海外研修旅行ではベトナム・ラオス両国で現地の生活や社会環境に触れる機会が多く設けられていた。国によって生活の様式や社会の状況がどのように異なるかを知り、その国特有の文化や環境について興味を持ち、異文化に触れることで多様な文化を理解したいと考えたため本題目を設定した。また、ベトナムやラオスの生活は日本とどのような共通点や相違点があるのかについて調べたいと思ったため、本題目を設定した。

2. 考察

まず、ハノイでは非常に多くのバイクが公道や私道を通っており、信号は設置されているが意味をなしていないほど交通量が多く大変驚かされ、同時に恐怖を感じた。ベトナムでは車よりも価格が安く移動が便利という理由からバイクが普及し、急激にバイクに乗る人口が増加したことによって交通法や交通の整備が間に合っていないため、信号無視や過剰交通量が改善されない状況に陥っていると考えた。また、バイクから排出される排気ガスにより大気汚染が深刻化しており、現地の人々はマスクを着用している割合が非常に高く感じられた。さらに、二人乗りや三人乗り、電話しながらバイクを運転する人が多く、日本ではありえない光景であった。

次に、ベトナム・ラオス両国に共通する問題である水質汚染の現状に驚かされた。日本では水道水をそのまま飲むことができるが、ベトナムやラオスの水道水は衛生管理が不十分であり安全でないため、飲料水が必要な場合はスーパーマーケットやコンビニエンスストアで購入しなければならなかった。そのため、今回の研修で改めて日本の水の安全性が高いことを認識することができた。現在 SDGs 目標の一つに設定されている「6:安全な水とトイレを世界中に」を達成するため世界で様々な政策がとられているが、ベトナムやラオスがこの目標を達成できる可能性は現状では低いと感じられた。

3. 研修を通しての学び

今回の研修では、ベトナム・ラオスの両国から日本との生活や文化の違いを強く感じ、その国や地域特有の暮らし方があることを学んだ。今回の研修を通して私が最も衝撃を受けたのは、ラオスの田舎の村の小学校を訪ねた際の現地の環境である。村は山の中の田舎にあり、町からは車で移動しなければならない距離があった。そのため食料などは山で採った山菜や狩った鶏などが主であり自給自足の生活をしていて、また、気温がとても高く暑さに慣れていない私たちは非常に過酷な状況だと感じさせられた。しかしながら、現地の子供たちは暑さを感じさせないほど元気で笑顔が多く、小さな頃から環境に適応していて驚かされた。さらに、教育に必要な教材や施設が十分でない中で自分たちの置かれた環境や自然を生かしており、環境への適応力と応用力を感じた。

研究題目「日本での世界史教育とベトナム史の実際」

2 年 奥田真優

1. 研究動機

私は高校生の時に世界史を選択していた。しかし、ベトナム、ラオス、といった国々について学ぶ機会はなく、“東南アジア史”としてタイやカンボジアを含めて扱っていた。東南アジア史とはいっても、各国では言語も違えば、文化も違っているだろうと予想し、国際理解としての視点から、研究したいと感じた。そして、各国にはどのような歴史があるのか、どのような変遷を遂げてきたのかについての疑問を持ち、この研究題目を設定した。本研究においては、ベトナムに焦点を当てることとする。

2. 考察

まず、日本でのベトナム史教育とともに簡単にまとめ、現地で感じたことを含めて考察する。ベトナムは、世界史Bにおいて「大越国」と呼ばれる。大越国は、李朝、陳朝、黎朝という3つの王朝を経て独立していくと学習するのだが、長期王朝が続いた、というだけで、実際はこの時期にも中国の影響を受けていたことになる。中国支配の影響を受けて、漢字をもとにした字喃（チュノム）が使われていたことや今でも旧暦を重用していることなどとも考えることもできる。実際、お寺では未だに漢字表記の言葉も多く目にした。また、“箸”一つをとっても中国と似たような太さ、形をしていたことにも着目したい。

一方で、19世紀になると、フランス革命の影響を受けて、フランスの保護国となる。フランス植民地時代に字喃（チュノム）は廃止され、現在の文字となった。ホアロー捕虜収容施設での体験を通していても、フランス植民地下時代には、フランスと同じようにギロチンを用いた処刑を行い、文字も変化し、国内の混乱を引き起こしたのではないかと予想される。このようにして、中国の支配下であったことやフランス領であったことなどは世界史として扱うのだが、その中でどのような変化があったのかは詳しく学習しないのである。実際、今もなお、社会主義国であること、伝統的に仏教徒が多いが、カトリックを信仰する人も内部に多いことなどは、戦争の名残が残り続けているということであり、日本がベトナム南北の戦争に関わっていたからこそ教育に含むべきことなのではないか、と考える。

3. 研究旅行を通して

研究旅行を通して、初めて国を超えた戦争時代の名残を身をもって感じた。ベトナムは中国に支配されていた、という印象はあったのだが、実際は最後に大きな影響を与えたフランスの影響が多く残されていた。一つの建物をとって、概観はアジアのものであるのに、細かい絵柄はヨーロッパ風であることに驚きがあった。これは、日本での教育において、中国による支配を主に扱い、19世紀以降は東南アジア史として細かく扱わないからこそその発見でもあると思った。また、教育に関しても、どこか偏見を持っていたことに気が付き、“あるものでどうにかする”という考え方に圧倒された。私たちはいかに裕福で、物に頼っているのか、ということに気付かされた。ベトナムやラオスの文化や国の特徴を知るだけでなく、自分の価値観についても多くの発見があった。実際に体験しないと分からないこと、子どもを通して感じた世界のつながりなどをこれからの財産とし、更に世界に視野を向けて学んでいきたい。

研究題目「ベトナムの青空を見るために」

2 年 神田梨々花

1. 研究動機

今回の研修ではまずベトナム、次にラオスに移動した。ベトナムに行った際に、初日からのどの調子が悪い学生が多く見受けられた。また、天気予報に晴れと書いていても青空を見ることはなかった。私の友人が、3月6日にハノイの大気質指数が「Unhealthy」だということを教えてくれた。日本は「Good」、バンコクは「Moderate」であった。このように大気汚染の影響を受けているということが数値からも分かる。大気汚染と向き合い生活するために、ハノイで住む人々が行っていたこと、これから行っていくべきことについて次の考察では述べていく。

2. 考察

今回ベトナムとラオスに行き、大気汚染の主な原因は「自動車やバイクの排ガス」であると考えた。私たちのホテルがあるハノイでは道路がバイクや自動車であふれる様子や光景が見受けられた。また、ビエンチャンと比べてみても交通量の多さは比にならなかった。大気汚染の影響を受けているハノイではどのような対策が行われていたかを今から記述していく。

まず1つ目は、バイクに乗っている方たちがほとんどマスクを着用するということである、ハノイでは8時ごろが通勤ラッシュとなり、バイクや自動車の数がさらに多くなる、その際に、ほとんどのバイクの運転手の方がマスクを着用していた。バイクに乗る際だけにマスクをつけるということは、大気汚染の影響を受けないようにしていることが原因であると考察する。2つ目は、都市鉄道の建設である。交通手段がバイク、自動車であるハノイでは2021年10月に1路線が開通した。また鉄道建設に関連し、日本もベトナムに協力しているという記事を見た。

ハノイで生活をしている人々が大気汚染の影響を削減するために行っていること、大気汚染の問題を今以上に悪化しないために行っていることの2点について今回あげた。ベトナムで青空を見るためには、排ガスの削減などこれからさらに考えていかなければならないと考えた。

3. 研修旅行を通して学んだこと

約2週間で、海外の教育現場に行ったり、JICA事務所にいたりなど自分自身が興味のある場所にたくさん訪れることができた。実際にベトナム・ラオスに行ったことにより、環境問題が深刻であることや、日本での教育が当たり前ではないことを気づくことができた。いまの私に何ができるのか、将来どのように海外の方々と関わっていきたいのか今後さらに考えて生活していきたいと強く思った。楽しいのはもちろん、たくさんの学びがあったことから、今後の自分自身の人生で忘れられない2週間の生活になった。

研究題目「ラオスと日本の学校の違い」

2年 菊川千帆

1. 研究動機

日本の学校では、児童生徒一人につき一つの教科書やノートがあるのが当たり前である。また私たち日本の子どもは、当たり前のように学校で学習をする環境が整っている。一方、日本以外のアジア諸国の教育状況はあまり整っておらず、十分に学習ができる環境ではないということを大学の授業で学習した。実際にアジアの国の教育状況はどうなのか、子どもたちが十分に学習を行うことができる環境が整っているのかという点を実際に見て考えたいと思い、今回の研究題目とした。

2. 考察

私は今回、ラオスと日本の学校を比較していく。ラオスの学校、ドンカムサン教員養成学校で驚いたこと4つ述べる。1つ目は、小学生の子どもが原付バイクに乗って登校していることだ。日本では小学生が原付バイクに乗っている光景を見ることがないため、衝撃を受けた。中には4人乗りをしている子どももいた。2つ目は、時間の認識に違いがあるということだ。現地の JICA の日本人教員の方から「8時から授業開始であっても、ほとんどスタートは8時半以降になる」という話を聞いて驚いた。日本は決まりや時間を大切にしているため、文化の違いを感じた。また小学校の授業時間は1教科100分と聞き、小学生で100分も学習することは可能なのかという疑問とともに、授業開始時刻が遅れるため予め多く授業時間を確保しているという意図を汲み取った。日本だと時間や決まりを守らなかったら教員から指導があるが、ラオスではないそうだ。基本ラオスの方は怒らない、喧嘩をしない、温かい人が多いため、学校現場でも指導する風景は見られなかった。3つ目は、ICTが導入されていたことだ。ICTは日本でも近年導入されたため、ラオスはまだ導入されていないと思っていた。しかし、電子黒板や教員のパソコンなど様々なICTが導入されていた。導入はされているが問題点としてICTを上手く使えていないという点が挙げられる。教員もパソコンの使い方などわからないため、これから知識を取得していくことが大切だ。そうすることで日本とラオスの学校をICTでつなぎ、お互いの国の子どもたちが交流することができるようになる。4つ目は、教科書が毎年使い古して、子どもたちが新年度に新しい教科書を使うことができないことだ。1人1つ教科書がなく、4人で教科書を見ていた。この状況では子どもたちが十分に学習できる環境とは言えない。

しかし、私はラオスの学校は日本の学校に比べてアットホームな感じで、みんなで助け合いながら一体感を持って生活をしている感じがして好きだ。教師と子どもの距離が近く、家族のような雰囲気だった。村の学校では学校の敷地内に保護者もいて、保護者・教員間の距離も近く、毎日が参観日であるかのようだった。私たちは今回、子どもたちにけん玉を教えに行っただが、保護者も楽しく一生懸命になって取り組んでくれた。その頑張っている保護者の姿を見た子どもの目が、輝きで満ちていた光景は忘れることはないと思う。最後にハンカチとスポーツ服をプレゼントしたとき、宝物のように抱きかかえ、心の底から喜んでいる子どもたちを見て「研修で来ることができて良かった」と改めて感じることもできた。研修で一生の宝物になる貴重な経験をすることができた。

3. 研修旅行から学んだこと

今回の研修で「笑顔は世界共通である」と改めて実感した。たとえ言葉が通じなくても笑顔で言葉を越えた交流をすることができる。またラオスの方の「無いから諦めるのではなく、あるもので作る」というマインドを私達日本人は学ぶべきであると実感した。モノや技術が溢れかえっている私たちはその便利なツールに依存してしまっているように感じる。日本とラオス、互いの国で学び合って成長していくことが大切であると考えている。

研究題目「観光客が多い理由」

2 年 濱田満菜実

1. 研究動機

今回ベトナムとラオスを体験して山口市に帰り、山口市には観光客がとても少ないかと第一に感じた。最近ニューヨーク・タイムズで 2024 年行くべき 52 か所を発表し、第 3 位に山口市が選ばれたことを SNS で見つけた。都道府県の魅力度ランキングでは毎年下から大体 5 番目の常連県であり、人口は年々減っている傾向にあるのが現状である。世界的な記事で山口市を紹介されたことから、これから海外の方だけでなく日本人も観光を目的にたくさん来るのではないかと予想される。このような観光客に山口市だけでなく山口県全体の魅力を知ってもらいたい、山口県に住みたいと(Iターン)思ってもらいたいと思い、観光客が絶えないベトナムとラオスから学べることはないか研究をした。

2. 考察

まず、ベトナムで過ごして感じたことは、有名な観光地やお店が多いことだ。今回の研修に参加する前にベトナムをについてインターネットで調べてみると観光地やカフェなどお店の写真がたくさん掲載されており、ベトナムに行く前から行きたいところを何か所もピックアップすることができた。では、山口県はどうか。私は山口大学に入学してすぐ、友達と夕ご飯を食べに行こうとなった時、情報があまりにも少なくお店選びに悩んだことがあった。山口市に住んで 2 年経つが、散歩しているときにおしゃれなお店やネットには掲載されていないお店を何軒か見つけたことがある。こんなに魅力的なお店があるのに世に知られないのはもったいないと感じた。またラオスでは、山口に似たような、ゆったりとした土地だなと感じたが、夜にはナイトマーケットや定期的に行われる市場など観光客であふれかえっていた。山口県はナイトマーケットのようなものはないが、伝統的なお祭りや施設が開催するお祭りが定期的に行われているが、年々参加者が減少している印象がある。そんな山口県に SNS に良いところを拡散して山口県を訪れた際にたくさんの思い出を作してほしい。

また、ラオスとベトナムは日本に比べて快適に過ごすことができた。特に私はラオスの雰囲気がとても好きで、日本には当たり前にある信号機やビルなどがなく、ゆったりと時間が過ぎていく感じがとても心地よかった。山口県はどちらかといえばラオスに雰囲気が似ている気がする。観光地や商店街は最近人通りが少なくなってきたが、田舎の良さやフレンドリーなお店の方やお店に来た方の感じがとても感慨深く感じ、そこがラオスと似ていると感じた。

3. 研修旅行から学んだこと

時代が進むにつれて変わっていきこうという考えも大切だが、今ある山口県の伝統的な建物や街、素敵な人たちが変わらずこれからも生き続けてほしい。そしてそんな山口県の良さを県外海外の方に知ってもらえるように発信していきたい。

研究題目「ラオスの儀式」

2 年 深井悠楽

1. 研究動機

ラオスにはバーシースークワンという儀式がある。バーシースークワンとは、バーシーは「捧げもの」、スーは「～へ」、クワンは「魂」という意味であり、悪いものをからだの中から追い出し、逆に良い魂をからだに取り込むという儀式である。

2. 考察

私は、この儀式を研修 10 日目の村で受けた。学校の一室を使用して行ったその儀式は、村の村長などたくさんの現地の大人たちと行った。部屋の真ん中には大きな皿の上に水と焼いた鶏肉、白米が置かれており、皿の中央にはオレンジと白の紐をたくさんくくりつけた棒と、オレンジ色の花が何本も立っている。後から調べて分かったことだが、花の種類はマリーゴールドという花で、東南アジアやインドなどの仏教が盛んな国では「お供え」としてよく使用されるそう。私たちと村の大人たちで車座に座ると、村長がお経を唱え始めた。現地の大人たちの真似をして手を合わせながらお経を聴く光景は、同じ仏教を信仰している日本の私にとってなじみのある光景であった。お経が終わると、今度は村の大人たち全員で私たちの手首に紐を結んでくれた。この紐は 3 日間は外してはならないとされており、村の大人一人ひとりが私たち全員の手首に紐を結んでくれるので、終わったところには両手ともたくさんの紐が結び付けられていた。そして儀式の最後には鶏肉とごはん、お酒が振る舞われ、私たちが無事に日本に帰国できるようお祈りをした。

ここからは、日本の文化と比較をしていきたい。日本には神道と呼ばれる文化がある。仏教とは異なり、山や岩、木など様々なものを神聖な物として崇める、現在でも日本の行事や風習に深く関わっている文化である。日本では、特別な行事や親しい人に大きな変化が起こるときには神社でお参りをする習慣がある。私は、この「お参り」という文化がラオスで体験したバーシースークワンにとっても似ていると感じた。お参りでは、自分だけで神社にお賽銭を納めてお祈りをする場合と、神主と呼ばれる儀式を取り仕切る人がおり、その人に合わせてお祈りする場合がある。特に後者はラオスで村の村長に合わせてお祈りをした光景とよく似ている。

3. 研修旅行を通して学んだこと

たくさんの文化の違いに驚くことも多かった今回の研修においてラオスと日本の似た文化を見つけた一日であった。

研究題目「ベトナムの環境問題について」

2 年 藤本優風

1. 研究動機

ベトナムに到着すると空がかすんでいて空気が良くなかった。また道端ではいたるところにごみが見られた。そして、現地の人々は当たり前のように路上にごみを捨てていた。日本では考えられない光景、及び行動であったため、衝撃的であった。しかし日常的にごみを捨てているにしては、街にごみが蓄積しているようには思えなかったため、どのようなシステムになっているのかという疑問を持った。このような理由から、研究目的を設定した。

2. 考察

今回は環境問題の中でも、大気汚染とごみの回収システムについてみていく。

まず、ベトナムの大気汚染は世界でも深刻である。2022 年 3 月には大気汚染の程度を示す大気質指数が「160~220」と世界ワースト 3 に入る数字を計測したにも関わらず、ここ数年は改善が見られていない。ハノイ市では1月~3月の時期に、地面の空気が上空より冷たくなることがある。この状況は逆転層と呼ばれ、大気の安定度が高くなることに加えて風も弱くなるため、汚染物質が拡散されない状況が続く。そのため街を覆うようなスモッグが発生し、健康に深刻な被害を及ぼす PM2.5 の粒子によって肺の炎症や呼吸器疾患を引き起こす人も少なくない。このように地形的な問題がある。また、人為的な大気汚染の要因としては、野焼き、建設工事、工場からの煙、車・バイクの排気ガス等があげられる。これらの条件の下、深刻な環境問題が引き起こされていることが分かった。

次に、ごみの回収システムについて見ていく。日本では、行政が指定するごみ袋にごみを分別して捨てる方法が取られているが、ベトナムでは家庭ごみを出す際に気を付けなければならないルールが特にない。具体的にはごみの分別をする必要がないため、各家庭がごみを 1 つの袋に押し込む。そして行政の指定するごみ袋がないため、基本的にスーパーやコンビニの袋を使用する。また、ごみ出しの場所や時間の規定がないため、各家の前に好きな時間にごみを置く。このままでは街がごみで溢れてしまうが、街を巡回してごみを回収する清掃員がいる。彼らがごみを収集車に集積し、ごみ処理場まで運搬する。そこで処理され、埋め立て地に投棄されるシステムとなっている。ベトナムでは「ポイ捨て」が常習的に行われるため、清掃員はごみを回収するのと同時に街の清掃も兼任している。したがって、清掃員のおかげで街がごみで溢れることから回避されているが、路上からごみが消えることはない。また、人々の疾病や自然環境に多大な影響を与える医療廃棄物を除き、多くの廃棄物は適正に処理されずに埋め立てられている。郊外では廃棄物が放置されただけの土地も多くみられる。このように、ベトナム国内では廃棄物を堆肥化するコンポストや廃棄物の燃焼から熱エネルギーを得て行う焼却発電を行う設備も存在するが、維持コストの高さや収益性の低さから普及は進んでいないことが分かった。

3. 研修旅行を通して学んだこと

日本は衛生面においては国民の健康を守るためのシステムがかなり発達していることを改めて感じた。国にはそれぞれの背景があり、発展度も大きく異なる。そのため、もちろん価値観も異なる。自分たちとは価値観が違うから理解し合えないと簡単に片付けるのではなく、相手がどのような価値観を持っているのかを理解し、積極的に関わっていきたいと思った。今回の研修旅行では、現地の学生と交流する機会を多く設けていただいていた。国を問わず、子どもたちは可愛く、また教育に関しては、教育の発展が重要視され、高い関心を持つ親が多いことが分かった。本研修を通して、これまでは海外の教育現場で働くことが遠い夢のように感じていたが、具体的な将来プランを視野に入れて考えることができるようになった。そして刺激の多い海外にとっても魅力を感じることができた。海外では自分の英語力の乏しさを実感したため、日々の授業に平行して将来プランの設計と英語力の向上を目指して残りの大学生活を過ごしていきたい。

<参考文献>

・CRE 倉庫検索. “ベトナムの環境汚染の現状と対策”. 2024/01/09. <https://www.logi-square.com>, (2024/04/21)

・ags-vn.com. ”[ブログ]もはや限界!?ベトナムが直面するゴミ問題”. 2016/10/28. <http://ags-vn.com>, (2024/04/21)

研究題目「日本とベトナム・ラオスの食文化の相違点・類似点について」

2年 松本芳奈

1. 研究動機

ベトナムやラオスでは、伝統的な料理や地元の料理などを一日3食通して口にしました。その中で、日本では食卓に並ぶことのない食材の数々に日本との食文化の違いを感じた。また、食材や料理には異なる中にも似ている点も見受けられ日本と両国との間にどのような違いがあり共通点があるのか研究したいと思い、この題目を設定した。(以降よりベトナム、ラオスを両国とする)

2. 考察

まず、本レポートでは食事のスタイル、食材、歴史との関連の3つの観点から日本と両国の食における相違点や共通点について考える。

第一の観点は食事スタイルについてである。食事のスタイルとしては両国とも朝・昼・晩の三食を摂り、家族や職場の同僚などと食卓を囲み団らんを楽しむ文化がある。この点は日本にも似ており、食事を通して人との交流を深めている。また、ベトナムでは日本料理に一汁三菜があるように、必ず汁物が出されご飯にスープをかけて食べることが多い。理由として、インディカ米は水分量が少ないことが考えられる。また、食事をとる場所が日本とベトナムは屋根のあるところで食事を取る事が多いが、ラオスは屋外に椅子を出して食べることが多く、家で作ってもの庭先で食べることもある。これは、ラオスじゃ基本天気が良いことが多いことが理由であると考えられる。

第二の観点は食材である日本との共通点は主食が米であることだ。しかし、日本人になじみのあるジャポニカ米では無く、ベトナムはインディカ米、ラオスはもち米が主流である。野菜や果物も日本ではあまり目にしないものが多く、果物はジャックフルーツ、パッションフルーツ、タマリンドなど熱帯地域で取れる果物が市場に多く出回っており、家庭でもよく食べられるようだ。一方で、イチゴやベリー系の果物は気温が高すぎて育たないため、売られていない。野菜では、空心菜、パクチー、などが食卓を彩っていた。近年では日本でもアジア料理ブームが来ており、空心菜やパクチーもスーパーマーケットで買えるようになってきた。このような食材の違いは気温が所以していると考えられ、熱い国だからこそある食べ物が豊かであった。

三つ目の観点は、歴史との関連だ。両国とも他国に植民地支配されていた時期があり、ベトナムは19世紀から20世紀にかけてフランスの植民地であった。ほぼ同時期にラオスもフランスに植民地支配されていたことから、フランスの食文化が形を変えて今も残っている。例えば、ベトナムのバインミーやラオスのカオチーなどはフランスパンにパイや肉などを挟んで食べるサンドイッチのような食べ物で植民地時代の食生活の名残を感じられる。日本では戦時中に介入した国の料理の名残とされるものがあるのか定かではないため、今後は日本食における歴史低背景についても調べていきたい。

3. 研修旅行から学んだ事

今回、ベトナム・ラオスと日本の食文化の違いについて知ることで、食について考え理解を深めるとその国の気候や習慣、さらには文化的背景も垣間見ることができるとを学んだ。また、一見異なる点が目立って見えるが食事を通して人との交流を深めたり、ほか国のものを工夫して取り入れたりと日本と変わらない点も多く以前より身近な国のように感じることもできた。今回は、食をテーマにしたが衣服や言葉など食と同じく人の生活に欠かせない物からその国について学んでみるとより本質に迫ることができるのではと考えられるようになった。今後海外に行ったときに、食だけでなく衣服や言葉についてもより深く学んでいきたいと思う。

研究題目「ラオスの宗教観」

2年 宮本美咲

1. 研究動機

私は10日間でのベトナム・ラオスでの滞在を通して、教育現場や博物館の訪問から現地での人々の生活に根ざしたさまざまな文化の違いに触れた。その中でも、私が特に関心を持ったものはラオスの宗教観である。ビエンチャンの街を車で走っていると、頻繁に寺院は出現し、早朝には托鉢するお坊さんが見られるという仏教色を感じる街の様子であった。そのような信仰が日本とは異なり興味深いと感じた。

2. 考察

ラオス国民のほとんどは上座部仏教を信仰しており、このきっかけは14世紀ごろにラオ族最初の国家であるランサーン王国のファングム王が仏教文化を取り入れたことに始まる。その様子は7日目に訪問したラオス国立博物館で学ぶことができた。

ラオスに滞在中、私たちは寺院見学や街の様子からラオスの宗教に触れる瞬間がたくさんあった。研修8日目にはワット・シームアンという寺院に立ち寄った。ここは、寺院を創設するためにシーという若い妊婦が生贄に名乗り出て、命を捧げた伝説から女性に人気のある寺院となっている。手首に白い糸を巻きつけて儀式を行っていたり、本堂で祈りを捧げたりと、ラオスに住む人々の信仰心を目にした。ここで私が最も興味を持ったことは、寺院を彩る豪華な仏像と寺院内の壁画である。日本の寺院では見られない色鮮やかな仏画で囲まれた本堂と、黄金に輝く仏像や建物の壁は驚くべきものだった。またその仏画をよく見ると、仏だけでなくヒンドゥー教の神々も描かれていた。ラオスは8世紀頃から中国文明とインド文明の影響を受けて仏教とヒンドゥー教が混ざった歴史があったり、クメール王朝の影響下にあった時代があったりしたと国立博物館で教わった。そのような歴史的背景が、僧侶のもと人々が祈ったり儀式を行ったりする仏教の寺院でヒンドゥー教の要素を発見するという、日本では見られない面白い空間を作り出していた。

最終日に訪問したタートルアン寺院では、国章にも描かれる国のシンボルである大きな仏塔をはじめ、周囲にある数多くの仏像や豪華な宮殿、僧侶がかつて使っていた会議場も見学することができた。この宮殿でもヒンドゥー教と仏教が混在した仏画が内壁を囲っていた。ガイドしてくださったトゥックさんによると、それらの仏画には物語があるそうで、ヒンドゥー教と仏教の交わりがラオスの人々にとって身近であることを知った。宮殿の隣には曜日の意味を持つ仏像が並んでいた。ラオスの人々は自分が生まれた日の曜日を意味する仏像が幸運をもたらすと信じているようだ。私は以前、この文化を隣国タイで聞いたことがあったため、国境関係なく地域に伝わる信仰を知ることができてとても良かった。寺院の敷地内にはラオスの国花であるチャンパーが咲いていた。このチャンパーは昔、仏教とともにスリランカから持ち込まれたと言われているそうで、国花にも宗教にまつわるエピソードがあることに驚いた。

最終日の早朝には、托鉢の様子を見ることもできた。静かで真っ暗な早朝に僧侶が一行になって歩き、食物を鉢に受けてお経を唱えている姿を見た。厳かな雰囲気の流れ、日本では得られない空気感を感じることができた。

3. 研修旅行から学んだ事

この研修を通して、インターネットで調べても知ることができない情報や感覚、雰囲気を肌で感じる事ができた。ここで感じたことや学んだことは小さな一瞬の経験に過ぎないが、本物の経験である。ここでの経験を一つの材料に、これからのより深い学びに繋げたい。

研究題目「幸せの価値観とこれからの途上国」

2年 吉武夢昂

1. 研究動機

私は日本とベトナム、ラオスの文化の違いについての話を聞き、私はその文化に触れあうことでどのように感じるのだろうかと思った。私は日本の文化のもとで生きていることが幸せであり、海外ではどうなのだろうか、また、海外の人たちはその文化に対してどのように感じるのだろうかという疑問を持った。また、実際にベトナムとラオスを訪れてこれらの途上国がどのようになるのかという疑問を持った。このことから、この題目を決定した。

2. 考察

私はベトナムとラオスの小学校、中学校を訪れた際に日本とのギャップに驚いた。特に村を訪れた際は大きな衝撃を受けた。テレビでしか見ていなかった光景を目にして、私は本当にここが学校なのかと思った。日本にはあるものがなく、砂埃はたち、環境的にいいといえるものでもなかった。日本とのギャップに衝撃を受け、私は暮らせないと感じてしまった。しかし、子どもや現地の人たちと交流することで私の気持ちは大きく変化した。子どもたちは日本の子どもたちとは変わらず、とても素直で純粋で無邪気だった。子どもたちが日本の遊びを行っているとき、子どもたちはとても楽しそうで幸せそうな顔をしていた。私は子どもたちの様子を見て幸せの価値観は多種多様であり、一概に幸せの定義を決めることができず、国や個人などのによって異なると考えだした。

この異なった幸せの価値観を持ちつつ、途上国はどのように発展していくのだろうか。この先途上国が発展していくことで、現地のひとたちは今まで幸せと感じていたことに対してどのように感じるのだろうか。もし、発展して手にしたものがないのなら、元々幸せと感じていたことには十分の幸せを感じることができないのではないかと考える。なぜなら、人の幸せの価値は定義づけが難しく、国や地域、個人によって大きく左右されると考えるからだ。だからこそ、途上国は急速な発展ではなく段階をふんだ発展をしていくべきだと考える。

3. まとめ

私はこの海外研修を通して、人には人の、その国にはその国の幸せがあり、一概に外のものが幸せかどうかを決めてはいけなことを深く学んだ。実際に目にして、人と関わってみないとわからないことはたくさんあり、まだ私にはわからないことにほうが多い。わからないことが多いからこそ、私たちは互いの文化、幸せについて理解していかないとはいけない。今の日本にはこれらのことが足りていないと考える。

研究題目「ラオスの不発弾問題について」

3 年 石部百音

1. 研究動機

今回この研究テーマを設定した理由は、大学の授業の中でラオスの不発弾の問題と、COPE VISITOR センターについて学んだことがあったので、今回の研修旅行で実際に COPE VISITOR センターを訪れたり、ラオス国立博物館の展示を見たりすることで不発弾の問題について歴史と共に深く学びたいと思ったから。

2. 考察

ラオスの不発弾の問題についてフランスの植民地支配の時代からさかのぼって考察していく。ラオスの国境が国定したのはランサーン王国が分割されフランスによってメコン川をはさんでタイとラオスに分かれた。太平洋戦争時代に日本による傀儡政権が実施されることもあったが、日本が戦争に負けたことにより再度フランスによる支配がはじまった。フランス・ラオス連合友好条約が結ばれラオス王国は独立する。これ以降内戦が始まり、さらにベトナム戦争が始まったことでその影響を受けることになった。ベトナム戦争でアメリカはホーチミンルートを阻止するために大量の爆弾やクラスター弾を落とした。その数は約 2 億発で、ラオスは人 1 人当たりの爆弾を受けた数が世界一位だという。また不発弾は、30 パーセントが爆発せず土の中に埋まるため、爆発せず今も残っている。今も残っている爆弾の数は 8000 万発も残っている。さらに不発弾は今なお土に埋まっているため、日常生活を送っていても爆発によるけがなどの危険にさらされている。例えば炊事をしているときに熱が土に伝わり下に爆弾が埋まっているために爆発したり子どもがボールやおもちゃだと思っていたものが爆弾で爆発してしまったりするという。不発弾の除去活動はすすんでいるがそれでも毎年多くの被害者を出している。また不発弾によって手足がなくなってしまった人のための支援活動もあることが分かった。COPE VISITOR センターで義手や義足の体験をした。義足を付けて歩行することはバランスを取るのも難しく歩くことは到底できなかった。

3. 研修旅行を通して学んだこと

今回の研修旅行を通してラオスの不発弾の問題は考えていたよりも深刻だったことが分かった。不発弾のマップを見ると首都以外の場所は地図が赤くなっていて、いたるところに不発弾が埋まっていることを知った。ラオスの人は日常的に不発弾の危険にさらされていることが分かった。また不発弾によって突然当たり前だった日常が奪われること、義手や義足の瀬克になることの厳しさは私たちには計り知れないものがあると思った。カンボジアの地雷やベトナムの枯葉剤のようにもっと不発弾の問題が周知され早期解決に近づけるために行動することが大切だと思った。

研究題目「教室にあるものとなないもの」

3 年 伊藤実夏

1. 研究動機

今回、国際体験実習に参加し、大学や中学校、小学校など様々な教育現場を訪問することができた。その中で、特に印象的だったのはラオスのドンカムサン教員養成学校での算数の授業見学である。小学 2 年生の算数(かけ算の 4 の段の 2 時間目)の授業を参観させていただいた。その中で日本と同じ点と異なる点はどのような点であったかを考え、今一度日本の教育を見つめ直したい。

2. 考察

今回は大きく教室空間、児童、教師の 3 つの視点から分析することとする。1 つ目は教室空間において黑板や机といすがあることである。材質は木で丈夫に作られており、背もたれのある椅子を使用していた。これは学習規律を整えることに役立つと考えられる。よく見ると椅子の背もたれには「From the people of Japan」と書かれたシールが貼られていたため、日本が経済援助したものであることが読み取れる。次に児童は 2 年生で方眼ノートを用いて勉強していることである。方眼ノートはマス目があるので、図形や文字が書きやすく、学習内容をノートにまとめやすいことが考えられる。定規を持っていない児童にとっても、線があることで容易に図形を描くことができると考えられる。3 つ目は日本と同じ教科書が使われていたことや、フラッシュカードを用いて復習を行っていたことである。実は日本の東京書籍が作った教科書が採用されているのである。このように日本の経済援助等によって日本と同じ点を発見することができた。しかし異なる点も存在している。例えば教室の中にスクリーンが存在しているが、日本のようなデジタル教科書はなく、自分でパワーポイントを使って、教具を作成しないといけないところである。また児童たちは靴下や裸足の状態で上履きを履いていない。さらにノートは日本の物よりも小さく、鉛筆は消しゴム付きの一本のみを使用していて筆箱がない。加えて教科書はその学年が終わると次の学年に渡されるので、自分の物にはならない。そして先生側も教具が日本の物であるからこそ、使い方を知らないことが多いことなどが課題として挙げられた。したがって、日本と同じ教育をしようとしても国の経済力の差等によって、教材や教具が不足している状況を知った。同時に便利なものが存在していても、使い方を学ばなければ、その良さを生かすことができないことも知った。しかし、日本では当たり前にある黑板で用いる磁石も、電子教科書も整っていないからこそ、「そこにあるもの」を使って工夫する創造力がラオスの教育の発展の原動力となることに違いない。そのようにして、全国民の教育水準を高めることによって国力を高めることにもつながっていくと私は考える。

3. 研修旅行から学んだこと

日本ではギガスクール構想で一人一台端末の導入が行われ、ますます教材・教材が充実してきているといえる。しかし、そこにはノートに書くことや椅子に座って授業を受けることなど、教育では変わらず受け継がれているものも存在している。教育において何を残し、何を変えていくのか。そして、便利になる世の中において、教育の中で大切にされていることは何か。それはどの国でも考えなければならない問いである。そして教材・教具、教室空間が充実した日本教育を受けてきたからこそ、気づかない当たり前が存在している。日本の教育が世界のあたり前ではないことを踏まえたうえで、私は教師として児童の成長を手助けできる存在になりたい。そして今回ラオスの教育から学んだ「ないからできない」のではなく、「ないからこそ作る」という向上心とチャレンジ精神を持ち続けたい。そして、どの国でも共通している児童の輝く笑顔が守られる世界であることを切に願っている。

研究題目「ラオスにおける自動車メーカーの違い」

3年 江本蘭生

1.研究動機

ベトナムでは多くの日本車が走っていたが、“世界のトヨタ”とも言われるほど世界でも需要のある日本車がベトナムでも走っていることは疑問に思わなかった。しかし、ラオスでは日本車はベトナムと比較するととても少なく、韓国車が多く走っていたことから、なぜ韓国車がこんなに多いのだろうという疑問を持った。

2.考察

ベトナムで日本車が人気なのはやはり、日本製のものは“質”がいいからだと考える。私が行ったことのあるシンガポールやタイでも日本車は多く見られた。タイに従兄弟が住んでいるため、なぜ日本車は人気なのかということを尋ねると、車に限らず、日本製のものは質がいいからだと言っていた。また、ここに挙げている国は全て親日国と言える。日本企業はODAを通じてベトナムに援助を続けており、これによりベトナムの経済成長が後押しされたためベトナム社会では親日が増えたと考える。そのため、日本車がベトナムで人気である理由も納得がいく。

その反面、ラオスでは多くの韓国車が見られた。その理由をラオスでできた友達になぜか聞いてみると、韓国の企業がラオスで成功したからだ。と言っていた。ネットで調べてみると確かに韓国の大型スーパーやロッテリアがラオスに進出したり、確かに街の至る所にハングル文字があるのを見た。また、韓国人観光客の数が多くことや韓国からラオスへの直行便があることから私が想像する以上に韓国はラオスに浸透していると感じた。さらに、ラオスから日本に帰る時の飛行機で韓国人のおじいさんと仲良くなり、話を聞いたところ、ラオスに来ている韓国人はみんな観光か仕事をしに来ている人が多いと言っていた。

このことから、ラオスの人々の多くが韓国車を所有する理由は、韓国がラオスに進出していることで自然と身近に韓国製のものが多くあるため、車を買う際の選択肢として韓国車が多く挙がるからという事とラオスで事業をしている韓国人が自国の車に乗っているのではないかと考える。

研究題目「ラオスの特別支援教育について」

3 年 大国礼

1. 動機

ラオスの COPE visitor センターに訪れた際に、不発弾の影響から手や足が不自由になった人々がいることを学んだ。また、元々特別支援教育に興味があり、手や足に障害がある方のための食事をサポートする道具の展示、義足を体験する場などがあり大変興味深かった。そのため、ラオスで行われている特別支援教育について研究したいと思い、この題目を設定した。

2. 考察

まず、ラオスの特別支援教育の普及についてである。障害は仏教の概念であるカルマを前世で抱えたためであるとの考え方があり、障害者を家庭に閉じ込められることも多い。ラオス政府としては、2003 年に障害者の権利に関する規定を制定し、2009 年に国連障害者権利条約を批准した。「2009-15 年国家教育制度改革戦略」では、インクルーシブ教育の推進に必要な機器の導入に加えて、重度障害のある子ども向けの学校の設立も言及されている。「2011-15 年インクルーシブ教育に関する国家行動戦略計画」において、少数民族や障害のある子どもを含むインクルーシブ教育の推進が掲げられ、進められている。2016 年時点ではラオス国内に特別支援学校は 3 校、インクルーシブ教育学校は 409 校ある。また職業訓練を重視した障害のある子どものための職業訓練校も設立された。よって、ラオス政府は障害のある子どもたちのための教育の普及を進める様子は見られるが、障害児を家庭に閉じ込めることの多さから、国民に障害のある子どもへの理解は進んでいないと考える。

次に教員養成学校での特別支援教育の授業についてである。ルアンパバーン教員養成学校では、特別支援教育や障害児に関する授業は、初等教育学科小学校教諭コース 2 年次のみで行われている。またラオスには特別支援学校教諭を養成する学校がない。そのため、知識があまりない教員が特別支援学校で勤務していると考えられる。また、ラオスのピアワット中学校では、自閉症の子のための教室が設置されている。しかし、専門的な知識を持った教員があまりいないといったことを聞いた。このように、政府は特別支援教育を充実させたいが、特別支援教育を充実させるために必要な教員の養成に課題が残っていると感じた。

3. 研修を通して学んだこと

ベトナム・ラオスに訪れ、日本とは異なる文化に触れることができ大変貴重な経験となった。しかし、共通する部分も多くあり、それを通して仲良くなることができた。このように異なる部分のみに注目するのではなく、共通する部分を見つけ関わっていくことの重要性を理解することができた。

(参考文献)

・鈴木春花・朝倉隆司ラオスにおける特別支援教育の現状と教員養成校の学生の認識—ルアンパバーン県の調査から—

[asakura-laboratory.jp/wp-content/uploads/2019/12/harukasuzuki.pdf](https://www.asakura-laboratory.jp/wp-content/uploads/2019/12/harukasuzuki.pdf) (2024 年 3 月 31 日閲覧)

・JICA「ラオス人民民主共和国 ラオスの教育制度」

https://www.jica.go.jp/domestic/yokohama/information/topics/2023/_icsFiles/afieldfile/2023/07/31/laos_3.pdf (2024 年 3 月 31 日閲覧)

研究題目「コミュニケーションにおける翻訳アプリの有用性について」

3 年 大前愛

1. 研究動機

近年における AI の進化は驚異的であり、人工知能を活用した翻訳機能の精度はますます向上している。そんな翻訳アプリの有用性について、私は以前から興味があった。ベトナムとラオスでは英語話者が少ないイメージがあり、かつ私はベトナム語・ラオ語を話せないため翻訳アプリを使用する場面が出てくると思い、今回の研究題目に設定した。

2. 考察

実際に現地の人々と会話してみて感じたのは、自分がイメージしていたよりも英語が通じる場面が多かったということだ。コンビニやナイトマーケットの店員など、外国人とやり取りをする機会が多い人は慣れている様子だった。特に滞在先のホテルやスターバックスなどでは日本語で会話ができる人もおり驚いた。

しかしながら 100% 自力でやり取りができたわけではなかった。日本人の学生同士でラオスの飲食店に行った際、英語でやり取りをしていたのだが、「個別で会計したい (pay separately)」「おすすめの味 (recommendation) はあるか」など難しい表現が含まれると伝わらないことがあった。そこで翻訳アプリを用いて日本語→ラオ語に翻訳し、それを店員に見せると、「そういうことか!」と理解してくれて、無事欲しいものを購入することができた。翻訳の際に、伝えたいことを易しい表現の日本語にしてアプリに入力したため、意味が伝わりやすかったのではないかと考える。

試験とは違って、日常会話などの文法の正確さがあまり求められない場面においては、翻訳アプリはコミュニケーションの手助けとなることが分かった。

3. 研修旅行から学んだこと

今回の研修旅行では、現地の方々の人柄の良さを実感した。彼らと英語でやり取りをされていて自分が伝えたいことが伝わらなかったときに、彼らが私の話すことを頑張って理解しようとしてくれていたのが嬉しかった。初めての海外で不安なこともあったが、新たな発見もたくさんあり良い経験となった。機会があれば、改めて観光に訪れたいと思う。

研究題目「言語の壁は本当に生じてしまうのか」

3 年 金井瑞

1. 研究動機

海外に行くにあたってコミュニケーションは言語であることが多いと思います。そんな中で「言語の壁」を感じる人は少なからずいるのではないのでしょうか。私は今回ベトナム・ラオスに行くにあたって、交流する相手は日本語ができる方が多いことも知っていましたが、中には日本語でのコミュニケーションが取れない方もいるのではないかと考えており、その際に言語の壁のせいでコミュニケーションは本当に取りづらくなってしまうのかが気になりました。言葉以外のコミュニケーションでの距離の縮め方を自らの肌で感じるためにこの研究題目を設定させていただきました。

2. 考察

私は英語でコミュニケーションが取れるほど英語が得意ではありません。しかし、ベトナム語もラオス語もあいさつ程度しかできないので、私に残されている言語は日本語のみでした。訪問した先の同じ世代の方々は日本語を勉強されているだけあって、日本語でコミュニケーションをとってくれていたのが言語で困ることはありませんでした。しかし、小学生や中学生は日本語を勉強しているといってもコミュニケーションは日本語では取れませんでした。もちろん自分の中でどのようにこの子たちに近づこう、話そうと葛藤しましたが、どうにか表情とジェスチャーで話しかけてみると子どもたちもこたえてくれて、言語ではないコミュニケーションが取れた気がしました。現地の言葉が話せるに越したことはありませんが、コミュニケーションは言葉だけではないのだと誰もが知っておくべきだと感じました。表情だけでも相手に気持ちを伝え、伝えられるコミュニケーションの1つだし、ジェスチャーも立派なコミュニケーションです。特にラオスで訪問したナポ村では授業は通訳がいましたが、それぞれの班では通訳なしにコミュニケーションをする必要がありました。けん玉披露もコミュニケーションになったし、折り紙もコミュニケーションになったと思います。自分が話したいという気持ちを持っているか、それ次第で通じ合えるものもあると感じました。

3. 研修から学んだこと

まわりが英語を話せる中、私は話せなかったのが英語で話しかけられた際も聞き取れても返すことができませんでした。それが本当に悔しかったし、今まで勉強していなかった自分を責めました。だけど、言葉が話せなくても同じ人間として気持ちを通じ合えることができるんだと自分がやってみた数々のコミュニケーションでわかることができました。海外に行くのに現地の言語を習得してから行こうとする努力も必要ですが、現地でいかにコミュニケーションを自ら取ろうとするか、これも重要になってくると思いました。英語なら理解できるくらいの教養はありますが、英語圏ではないベトナム・ラオスに行ったからこそ挑戦できたと、知ることができました。貴重な経験になったと思っています。

研究題目「ベトナムの英語科教育とラオスの算数科教育について」

3年 後藤利奈

1. 研究動機

この国際体験実習では、ベトナムとラオスの小学校や中学校、大学など様々な校種の学校に赴いた。私は小学校教諭を目指しており、日本以外の国の教育について興味があったため、この研究題目を設定した。ベトナムとラオスの教育について、それぞれ実習を通して印象に残った事柄を取り上げながら考察を述べる。

2. 考察

ベトナムで赴いた学校の中で、特に「ベトナム日本国際学校」が印象に残っている。この学校はベトナム語だけでなく、日本語、英語の多言語で教育を行っていた。英語の授業をネイティブの先生が行っていることや、学校内のホールや図書館などに日本語のみ、英語のみのエリアが設けられていることなどから、グローバルな印象を持った。特にネイティブの先生が英語教育を行っているということに驚いた。ベトナム全体が英語教育に力を入れているのかについて疑問に思い、インターネットで調べた。その結果、ベトナムの英語力は世界的に標準的なレベルであり、日本人よりも高い英語能力があるということが分かった。また、アジアでも比較的英語が得意とされていることが記されていた。都市圏であるハノイやホーチミン市では小学校1年生から英語教育を取り入れているところもあるようだ。なぜ英語教育に力を入れているのかを疑問に思い調べたところ、英語が使えるか否かが給与やキャリアに非常に大きな影響を与えるということが理由として挙げられていた。ベトナム人の大卒者は外資系企業の就職を目指す傾向にあることや、IT分野でも英語を用いたコミュニケーションが重要になることから、幼少期からの英語教育が重視されている。ベトナムの子どもたちが受けている英語教育を知り、日本の英語教育について再確認するきっかけになった。子どもたちが実際にネイティブの先生と生きた英語で話すことが大切になると考えるため、ALTの先生とのコミュニケーションや、教師の英語力などが課題になるのではないかと考えた。

ラオスでは、「ドンカムサン教員養成学校」で算数の授業を参観したことが印象に残っている。JICAの「ラオス国 初等教育における算数学習改善プロジェクト」にて、東京書籍の協力を得ながら算数の授業が改善されたことを知った。ラオスの教育の現状は、日本やベトナムと比較するとあまり良いとは言えない状況であった。協力隊員の成田さんの高話で、ラオスは教員も教材も不足しているという困難な環境であるという事が分かった。しかし、成田さんはその困難な状況であるからこそ、他の教員と協力しながら身近にあるもので教具をつくるという、工夫する力がついたということも仰っていた。課題として、日本の教科書を基に行われていることから、教科書の見方や教授法、一方的な授業展開などが挙げられていた。日本は現在、これまでの「一斉指導」から「個に応じた指導」という考え方が求められている。今後ラオスがどのような方針で教育を行っていくのか、興味深いと感じた。

ベトナムとラオスの教育について、日本を含め同じアジア圏であってもそれぞれ異なっており、とても興味深いと感じた。他の国の教育についても学びたいと強く思った。今後、日本の教育がどうあるべきか模索しながら、学び続ける教師として子どもたちと深く関わっていきたいと考えた。

3. 研修旅行から学んだこと

この研修旅行で多くのことを学んだが、その中でも2つのことについて述べる。

一つ目は、言語習得についてである。この研修旅行で日本語を学んでいる人に多く関わったが、日本語を話すことができるのは本当にすごいことだと思った。ラオ語を教えてもらう機会があり、その際カタカナで発音を書いてもらったが、「ディ」という発音が「リ」に聞こえたり、「ダ」という発音が「レ」に聞こえたりと、日本語にはない独特な発音の仕方で難しく感じた。教えてくれる子の口元を見て、一生懸命真似をして繰り返し発音した。言語を習得する上で、口の形を見て繰り返し真似をするということが重要になるという事を実感し、今後日本語や英語を教える際は、わかりやすいように大きく口を動かしたり、ゆっくり発音したりすることを心掛けたいと思った。また、ラオスに訪れて二日目、朝起きると両目が腫れており病院に行く機会があった。医者はフランス人のおじいさんで、英語で説明してくださったが、聞き取れない部分が多々あった。自分の英語力の低さと同時に、世界共通語である英語の素晴らしさを実感し、英語力を高めようと思った。

二つ目は、どの国の子どもも変わらず愛おしい存在であるということである。ワークショップで一生懸命けん玉をしている様子や、友達の様子を見守りながらアドバイスをするなど協力している様子、思いっきり紙飛行機を飛ばして楽しそうに遊んでいる様子などを見て、とても微笑ましかった。子どもたちの笑顔が輝いており、お互い言語が理解できない状況であっても、自然と笑顔になった。笑顔は人と関わる上で本当に大切なものだということを実感し、笑顔が素敵な教師になりたいと思った。

研究題目「日本教育と比べたベトナム・ラオスの教育」

3 年 韮光祥希

1. 研究動機

この海外研修では、様々な学校を訪問した。各学校において、日本の教育と似ているところ、似ていないところが様々であった。これらの類似点・相違点から、先進国である日本の教育は、発展途上国と言われているベトナム・ラオスの教育と比べてどのようなメリット・デメリットがあるのかについて考察し、日本の教育を見直す良い機会にしたいと思い、この研究題目を立てた。

2. 考察

まず日本教育とベトナム教育を比較していく。日本との類似点を考察していく。類似している点はたくさんあったが、その中でも、学校目標が学校の前に刻まれているということである。日本でも、校訓として、その学校が大切にしていることが必ず子どもの目に入る校門の近くに刻まれていることが多い。これにより、子どもに学校の目指している生徒像を明確に伝えることができ、自然と学校の目指す姿へと導くことができると思った。実際、JIS 日本国際学校では、日本の道徳観を育むということを学校の目標にしていたが、子どもたちは、きちんと挨拶をしたり、助け合って給食を配膳したりしており、学校の目標に沿って教育がなされていることが分かった。次に相違点は、2 つある。一つ目に、子どもたちは自由に育つ環境が整っているということである。日本では、子どもの主体性を主張するものの、子どもの自由度がそれほど確保されていないと思う。教師が、子どもの安全性やいじめのこともなどを考慮しすぎるがあまり、子どもに様々な制約がある。しかし、ベトナムの学校（JIS 日本国際学校、レロイスクール）では、先生が子どもを叱っている様子はほとんど見なかった。学校生活の中で、自分の趣味ややりたいことをいろんな場所で（運動場、芝生、トレーニングマシンなど）行い、のびのびと生きているように感じた。二つ目に、英語教育がとても発達していたことである。JIS 日本国際学校では、英語のみを話す階、日本語のみを話す階があったり、学校の先生がほとんど日本人であったりした。こういった環境の整備だけではなく、英語の授業では、all English で画像や動画などを用いることにより、子どもに英語の意味を予測させると同時に、子どもにそれらについて英語で説明させるような場面が何度も見受けられた。たくさん英語に触れさせ、子どもたちが英語を積極的に恥ずかしがらずに話す環境であったため、子どもたちの英語力が非常に高かったと考える。

ラオスでは、日本の支援（ODA）を受けて、建てられた学校もあったことから、基本的に日本に似た教育が行われていたと思った。日本との相違点として、無いものを工夫して作り出す発想力に違いがあると

思った。学校で、使えるお金が限られているラオスでは、教師自身が様々な教具や道具を工夫して作り出すことにより、よりよい教育を目指している姿が見えた。日本でも便利なものを使うことだけでなく、頭を使って工夫する創造性を身に付けられるような教育をしたいと思った。ベトナム・ラオスで感じた日本との違いに着目し、よりよい教育を目指していきたい。

研究題目 「日本とベトナム、ラオスの教育制度の違い」

3 年 中村千紘

1. 研究動機

ベトナムとラオスの学校に訪問した際に、「日本の教育制度は進んでいる」と言われることがあった。さらに、ラオスでは、日本の東京書籍と JICA が協力して、教科書の共同開発が行われており、すでに現地の学校で使用されていることを知った。そこで、日本とベトナム、ラオスの教育制度にはどのような違いがあるのか疑問に感じ、題目を設定した。

2. 考察

まず、義務教育の歴史を見ると、日本で1つの画期となったのが、1886 年の小学校令である。そのときに、有償の 4 年制尋常小学校と無償の小学簡易科が準備された。その後、1947 年には、教育基本法により、義務教育は 9 年と規定された。学校教育法ではより具体的に 6 歳から 15 歳までの 9 年間を義務教育期間とした。一方、ラオスにおいてはじめて学校が体系化されたのは、1996 年の首相令である。初等教育 5 年間が義務化・無償化されたものであった。その後、2000 年に教育法が成立し、改正を経て、2015 年に現行教育法が発表され、前期中等教育がそれまでの 3 年から 4 年に延長されるとともに、義務教育となった。現在のラオスの義務教育期間は 9 年である。さらに、ベトナムでは 1998 年の教育法により、初等学校における 5 年間の教育は義務教育と定められた。さらに、2005 年には、義務教育は下級中等学校を含む 9 年間とされ、さらに、2019 年には、就学前の 5 歳児教育を加えた 10 年間が義務教育となった。しかし、修了することが義務付けられているのは 6 歳から 11 歳までの初等学校のみである。

このように義務教育を 1 つとってみても、ベトナムやラオスに比べて日本では、早い段階から政府は教育について改革を始めてきたということがわかる。さらに、就学率を見ていくと、日本の義務教育における就学率は、ほぼ 100%であり、義務教育を超えた高等学校への進学率も 95%を超えている。それに対し、ラオスでは、初等教育は 92.35%ではあるものの、義務教育である前期中等教育は 67.65%であり、後期中等教育に至っては、50%を超えない結果が出ている。考えられる原因として、ラオス語を生活言語としない少数民族がラオス語で授業を受けることや、約 4 分の 1 の小学校が 5 年生まで開講されていない現状に起因すると考えられる。ベトナムでは、初等学校の就業率はほぼ 100%に近いが、義務教育段階である下級中等学校になるにつれて、下がっていき、高等教育に至っては、30%ほどまで減少していることがわかった。要因としては、中等教育から学費の納入や制服、教科書の購入が必要となることも

大いにあるのではないだろうか。歴史が長いゆえに、教育制度が確立されており、現在の就学率においても発展が伺える。

3. 研修旅行から学んだこと

普段当たり前のように使っていた教科書や道具でさえ、十分に与えられず、学んでいる子どもや十分な教育を受けられていない子どもいる現状を目の当たりにした。今後も世界に目を向けて教育支援を行っていきたいと思う。

研究題目「ベトナムの英語教育から学ぶ日本の英語教育に必要な要素」

3 年 三上ふた葉

1. 研究動機

この海外研修では、約 2 週間ベトナムとラオスに滞在し、両国の小中学校や大学、インターナショナルスクールなどの授業を参観した。その中で、ベトナムのインターナショナルスクールにおける英語の授業レベルが非常に高いことを知った。授業内容に着目し、日本の英語教育と比較することで、日本の英語教育及び英語の授業改善に役立てられる要素を研究するために研究題目とした。

2. 考察

参観した小学校 5 年生授業内で、日本教育に取り入れるべき教師の指導法及び工夫として、主に 3 つの要素が挙げられる。

1 つ目は、発音指導だ。「radio」の“a”を“ae”と発音する児童に対し、すぐさま“ei”と発音するよう指導していた。ほかにも、発音が違う児童がいた場合、教材の音源や教師自身の発声を用いて全体で確認していた。2 つ目は、スペル指導だ。全体を数名ごとにグループを分け、各グループにホワイトボードを渡していた。そして、課題を与え、その回答をボードに書かせて全体で確認していた。ボードに書かせることで、スペルの正誤を迅速に判断できるだけでなく、教師がスペルミスに気づき修正しやすい。加えて、各グループにオリジナルのチーム名を付けさせており、児童を飽きさせないとともにグループの団結力を高める工夫があった。3 つ目は、英語名を与えることである。すべての児童に英語名を与えることで、非日常感を感じさせ、学習の刺激とするとともに、母国語から離れて英語に集中させる工夫となっていた。

また、言語のインプット機会を多くすることも非常に効果的だと考えられる。インターナショナルスクールには、ベトナム語、英語、日本語のネイティブ教師が多数在籍している他、各言語しか話せないエリアが設けられているなど、言語のインプット機会が非常に多い環境が整備されていた。その結果、日本語コースでは非常に難易度の高い N1 や N2 に 10 名以上が合格している日本語コースの施設見学をしていると、給食室の掲示物や大学進学支援室の資料が日本語であるなど、日本語をインプットに関する工夫がなされていた。日本の児童の英語力の向上のためには、ICT の活用や教師自身の英語力向上に加えて、英語の掲示物や本などを置き、児童が英語に触れる機会を増やすべきであると考えられる。

3. 研修旅行から学んだこと

この研修旅行を通して、異文化理解には相手の文化についての知識的な理解と共に、それらを尊重し、受容する姿勢が必要不可欠であると学んだ。ゆえに、英語に親しませるためには、英語を用いる国々の文化にも着目し、英語を母国語とする人々にも興味関心を持てるようにすることも重要である。英語に対する興味関心が深まれば、英語力の向上につなげることができるのではないかと学んだ。

研究題目「異国でのコミュニケーションの多様性」

3 年 三船愛貴

1. 研究動機

私はこの海外研修は、現地の方々と日本語以外の言語でコミュニケーションをとることができる貴重な機会であると考えた。もちろん日本語は使用できず、英語か現地の言語をベースにコミュニケーションをとる。そこに不安もありつつ、うまく通じたときのことや、通じなかったとき他の方法はあるのかなどを考え、興味を持ったので研究動機とした。

2. 考察

考察だが、ベトナムとラオスそれぞれに分けて考察していく。

ベトナムで現地の方々とコミュニケーションをとる際は、基本的に英語を用いて行った。私の拙い英語でもそこまで苦勞することなくコミュニケーションをとることができた。比較的多くの方々が、私が日本人であると分かった瞬間に「ありがとう!」などの日本語の簡易的な挨拶をしてくれて、日本語が少し浸透しているという事実を知ることができた。人によって癖があり、私が話す英語を聴き取ってもらえないこともあれば、相手の発音が特殊で私が聴きとることができない場合もあった。その時に表情、ジェスチャー、擬音語など様々な手段を用いることで、コミュニケーションをとることができた。

ラオスで現地の方々とコミュニケーションをとる際は、基本的にラオス語を用いて行った。英語が通じることもあるが、体感的に通じる人とそうでない人で半々くらいだったように感じる。ラオス日本語センターの方々と交流会で、ラオス語の日常会話で使えるフレーズをいくつか教えていただいたので、現地の方々とラオス語を用いて会話を行うことができた。ラオス語は要素を足し算して文章を構成するようなもので、英語を初めて話すときのような感覚に近かった。繰り返し使用していくうちに、聞く方も話す方も少しずつ形になっていき、上達を実感することもできて楽しかった。ラオスでもうまく通じない時は、ジェスチャーや、擬音語を用いてコミュニケーションをとることができたので、外国の方々とコミュニケーションをとる際は、音声以外にも様々な手段があることを実感できた。

どうせ通じないからと控えるのではなく、覚悟を決めて話しかけてみることなど、何かにチャレンジすることは日本国内外どんな状況も関係なく大切であるということが分かった。

3. 研修から学んだこと

この研修では主に言語について目標を立てて参加をしたが、ベトナムではホアロー収容所、文廟、ラオスでは、COPE Visitor センター、ラオス国立博物館など文化的に価値のある施設をいくつも訪問することができた。ネットなどで見るだけでは分からず、実際に目で見ることでより深く学べることも多かったので、目で見ることに価値があるのだと改めて理解することができた。これからこの研修で得た経験を、友人などに共有することから初めて、将来の自己実現や、自分のための勉強に応用していきたい。

研究題目「コミュニケーションにおけるノンバーバル要素の効果について」

3 年 山下幸輝

1. 研究動機

日本の教育現場において、英語学習、特にスピーキング、に苦手意識を抱える児童生徒は多くいる。非言語的要素はこのような児童生徒に対する支援の1つになると考えている。それはコミュニケーションにおいて言語だけでなく、他に頼れるものがあるという心理的余裕が生じると考えるためである。この非言語的コミュニケーションの有用性を自ら体感することによって、児童生徒にノンバーバル要素の効果を具体的に伝えることができると考えたため、この研究題目を設定した。

2. 考察

授業では全体の流れの中で通訳の方がついてくださったが、個別の机間指導の場面では通訳なし、言語の通じない状況下でコミュニケーションを取る必要があった。この際、活動のデモや感情の表現においてジェスチャーなどを用いた。例えば、けん玉に苦労している児童に対し、子どもの手を取りながら一緒にやることで言語を介さずに成功に導くことができた。また「楽しかった?」と聞く代わりに、親指を立てて首をかしげると、笑顔でグッドマークを返してくれた。このように活動のデモから感情の表現まで、言語を介すことなく行うことができた。また日常生活において、値段が分からない際に手で数字を示したり、指をさしながら伝えたりすることで、円滑なコミュニケーションを取ることができた。このように、技能の伝達や感情表現、意思疎通など、非言語的要素で補うことができるということが改めてわかった。この経験から、コミュニケーションにおけるノンバーバル要素の重要性の高さを再認識した。よって、英語科教育において児童生徒にノンバーバル要素について指導する場面を増やしていくべきだと考えた。

3. 研修旅行で学んだこと

今回の研修旅行では、現地の小中学校で授業を数回行う機会があった。言語面や環境面（ICT や教室等）、児童生徒観において日本の学校と大きく異なる状況で授業をできたことは非常に貴重な経験となった。この経験から、言語に頼らない知識、技能の伝達方法について学ぶことができた。これを委託実習や今後の活動に十分に活かしていきたい。また、授業以外にも多くの博物館や歴史館の訪問など、現地の歴史や文化に触れることができた。ベトナムとラオスを比較すると、ベトナムの方が多くの展示品があ

った。さらに説明も具体的であり、力の入れ具合が伝わってきた。また、この研修旅行を通じて引率教員として研修をマネジメントすることの大変さも併せて学んだ。こまめに人数確認を行うことや日程を確認することなど、児童生徒の安全を守るために重要であると改めて感じた。また、それぞれの訪問先で追加の知識を児童生徒に伝えることで、より学びが深まることを体感した。私が引率者になった際には、訪問先について下調べをしてから臨むようにしたい。

研究題目 「ベトナム・ラオスの食」

3 年 吉村日和

1. 研究動機

私は食べることが大好きで、ベトナム・ラオスに研修に行くにあたって、ベトナム・ラオスでの食事が楽しみで仕方がありませんでした。ベトナムの食というと、真っ先にフォーが思い浮かびますが、それ以外の食べ物については全く知りませんでした。この研修旅行では、外食がほとんどのため、どのような飲食店があってどのようなメニューがあるのかについて気になったため、この研究題材を選びました。

2. 考察

ベトナムのフォーにはパクチーが入っているため、パクチーを使った料理が多いのではないかと予想される。また、ベトナム・ラオスは東南アジアに位置しており、インドやタイのイメージから、辛い食べ物が多いと予想される。

3. 研修旅行をして学んだこと

ベトナムとラオスで共通していることは、パクチーなどの香草類が入った炒め物やスープが多いということだ。また、生春巻き、揚げ春巻きもよく食べられていた。やはり、全体的に辛い物が多かった。また、ベトナムでは「バイン・ミー」ラオスでは「カオチーパテ」と呼ばれるフランスパンに具材をたっぷり挟んだサンドイッチのような食べ物があった。これはフランスの植民地であった時代に生まれた食べ物で、ラオスのカオチーパテの方が少しパンが柔らかく食べやすかった。

ベトナムでは、外食文化が盛んで朝ごはんを外で食べるという習慣があり、フォーは主に朝ごはんとして食べられるということが分かった。実際ベトナムでは朝に仕事に行く前にスーツ姿で麺を食べている人の姿があった。フォーは、牛肉や鶏肉、パクチーを入れて食べるのが一般的である。また、ベトナムには、ベトナム産チョコレートブランド「MAROU」というものがあり、そのカフェにはチョコレートを使ったスイーツや、お土産が販売されており、お洒落な空間が広がっていた。さらにベトナムは、ベトナムコーヒーが有名で世界2位のコーヒー豆の生産量を誇っている。苦みの強いコーヒーにコンデンスミルク（練乳）を加えており、甘くて濃厚でとても飲みやすかった。ベトナムの食事では一番衝撃を受けたのは、鶏肉が頭ごと出てきたこと。ベトナム人は鶏の頭まで食べるそうだ。

ラオスで食べた物には、「サイウア」というスパイスがきいたラオス風ソーセージや「カイペーン」というメコン川で採れる川海苔をさっと揚げたものがあった。カイペーンはビールのつまみとして好まれているそう

だ。ラオスの麺類は、「カオソーイ」という平打ちの米麺に少しだけ辛い肉みそが乗せられ、別皿で添えられる香草類やライムを加えて自分好みの味に仕上げるものや、「カオピャック」というタピオカ粉を混ぜた麺でもちもちとした食感が特徴のものがあった。また、「シン・ダート」というラオス風の焼肉・鍋料理もあった。鍋の中央部に焼くスペースがあり、その周りをスープが囲っている構造の鍋で、肉を焼けば肉汁がスープにしたり落ち、おいしいスープになった。そこでは、豚の乳房にあたる部位の肉があり、とてもおいしかった。ベトナムで食べた中で一番おいしかったのは、「カオニャオ」という炊き上げたもち米を竹製の籠につめこんだお米だ。お米を素手で一つかみ取り軽く握って、おかずを乗せたり、スープにつけたりして食べるそうで、初めは素手で食べることに抵抗があったが、異文化を体験することができ良い経験となった。

ベトナムとラオスの食事は、一皿に多くの量が入っていて、みんなで分けて食べるのが主流のようだった。日本にはない食べ物・食べ方を体験でき、いろいろな国の食文化についてさらに興味を持ったため、今後調べてみたい。

日記

3月5日

藤本優風

今日は朝の七時に福岡空港国際線ターミナルに集合した。その場で、みんなで写真を撮った。時間が速いこともあり、ターミナル内はそれほど混んではいなかった。荷物を預けて、出国手続きを行った後、搭乗ゲートと離陸時間を確認し、時間まで自由行動をした。初めての国際線で、免税のショップや日本のお土産屋さんがたくさんあることに驚いた。私は朝ご飯を食べていなかったため、コンビニで飲み物とサンドウィッチを買って食べた。機内食があるとは知らず朝ご飯を食べてしまったことを後悔したが、機内食の料理は温かくおいしかったため、完食することができた。機内食は2種類から選べたが、私の番が来たときにはすでに1種類しか残っていなかった。また、機内では枕と毛布がそれぞれに用意されており、快適に眠ることができた。ハノイ空港に到着したものの、入国手続きに時間がかかった。空港からバスに乗り、ホテルへ向かった。車窓から見える初めてのベトナムの景色はとても興味深かった。現地では車よりもバイクが交通の主流であることがすぐに分かった。また、排気ガスの影響か、空気はどこかすすんでいるように見えた。夕食の時間まで友人とホテル周辺を散策した。道路を渡るにも信号はあっていないようなもので、強引に渡らなければいつまでたっても渡れないことが分かった。今日はホテルで夕食を摂った。各テーブルにベトナム料理が運ばれた。ご飯は口に合うか心配であったが、香辛料がきいた麻婆豆腐や甘めのチンジャオロースのような炒め物等、中華料理と似た料理が多かったように感じた。またお米は初めてのタイ米を食べることができた。そして初めて口にしたパクチーは独特なおいがあり、好き嫌いが分かれていた。夕食後はホテル近くの日本のスーパーへ行ってみた。そこでは日本のお菓子や日用品が売っており、安心感があった。また、ハノイ駅までお散歩をした。ベトナムの路上にはごみがたくさん落ちており、通りすがりの現地の人がごみをあたりまえのように路上に捨てているのを何度も目撃し、衝撃を受けたが夜に路上のごみを回収しているのを見つけ、ごみのシステムについて把握することができた。夜の11時頃でも、バイクや車の交通量は多く、お店も開いていて明るかった。いたるところで外に机と椅子が並べられており、大人数で食事をしている姿を見かけ、晩御飯はみんなで仲良く食べる習慣があるのではないかと思った。

(バイクの交通量が異常に多い)



3月6日

濱田満菜実

今日はベトナムで初めて朝を迎え、朝食の時間はホテルで過ごした。

7時半頃にホテルを出発してハロン湾についたのは10時頃で長い時間バスに乗っていたが、初めての景色を体験したり今後の授業で使用する折鶴をみんなで作ったりしているうちにあっという間にたどり着いた。ホテルを出発して数十分は建物やバイクが目立つ街中だったが、時間がたつにつれて大きい川や田んぼのような自然豊かな風景がみられた。またハロン湾に行く途中に、真珠を養殖する施設に立ち寄った。女性の方々が一列になり椅子に座ってピンセットを使いながら細かい作業をしており、説明してくださるのをホアイさんが翻訳しながら教えていただいた。きれいな丸い形をした真珠は自然ではできにくいということを初めて知り、このような仕事があることのありがたさを実感した。

ようやくハロン湾の施設にたどり着き、船に乗った。船に乗ると現地のスタッフの方が真珠の腕輪や刺繍のポーチなど売られており、値下げしてもらおうと英語や現地の言葉を使って頑張って交渉している場面が多くみられた。また船の屋外に出ると私たちのような観光客が乗った船がたくさんおり、手を振ったり挨拶をしたり楽しい船の時間を過ごした。船から降りると電柱や電子機器がなく、自然の音にあふれておりとても心地よく感じた。少し歩くと鍾乳洞に入り、説明を聞きながら「たしかにそうだ」、「蛇の形には見えないよ」など友達と話しながら外より少しひんやりした空間を楽しんだ。鍾乳洞を楽しんだ後は、外で景色を写真に撮ったりお土産屋さんを観覧したりした。帰りの船では、お昼ご飯を用意して下さり、森先生に食べ方を教わりながらスパイシーな味わいのものやパクチー料理を体験した。施設から離れ、バスで帰る途中に夕ご飯にフォーが食べられるお店に寄った。観光客が多いからか、パクチーなしというカスタムができとても面白いなと感じた。またフォーと一緒に食べるクオイというパンが提供された。炭水化物のだらけでおなかも気持ちもいっぱいになった。夕ご飯をみんなで食べてホテルにつくと明日の予定の確認をしてそこから自由行動の時間になった。ルームメイトと夜のベトナム街を楽しみ、スーパーでは水やお菓子をたくさん買った。明日からも楽しみだ。

(紙幣になったハロン湾の岩)

(クオイの写真)



3月7日

荒川友花

今日は、午前中にベトナム日本国際学校で授業・交流会を行った。到着後は職員の方に学校の説明をしていただいた。校訓として、勉強ができるということは前提であるが、最も重要なことは優れた人格であるということを掲げており、日本の道徳や倫理を学生に教えるなど、人格教育を大切にしているという学校の特徴があった。ベトナム日本国際学校では、2歳児から高校生までの一貫教育をしており、日本語をメインで勉強するコースと英語をメインで勉強するコースに分かれていた。小学部の勉強内容は日本の小学校で勉強する科目とあまり変わらないが、日本語能力試験の勉強もあり、高等部では卒業するために国が定める卒業認定試験の勉強と日本語能力試験の勉強を同時並行で進める必要があるため1日8時間の授業を受けた後に各自で勉強するというかなりハードな学生生活を起っているようだった。学校についての説明が終わったあと、現地の職員の方に学校の中を案内していただいたが、プールやジム、バスケットコートなど様々な設備が整っているのを見て驚愕した。日本の私立の学校でもなかなか見られないくらいに子どもたちが自由に活動できる環境が整っていたので自分もこのような環境で学生生活を送ってみたいと思った。その後、私たちは5グループに分かれて小学部で授業見学と授業を行った。私は5年生を担当し、まず英語の授業を見学した。授業内容のレベルは日本の小学校と比較してそこまで変わらなかったが、授業の進行をすべて英語で行い、子どもたちの英語のやりとりがネイティブレベルで行っていたことに感動した。その後自分たちが授業を行った。授業内容としては日本の文化を知ってもらうことを目的とし、紙飛行機づくりと福笑いをした。授業前までは子どもたちとコミュニケーションがとれるか心配だったが、子どもたちの日本語理解能力に合わせてジェスチャーを使ったり、リアクションを大きくとったりすることで楽しく交流することができた。授業に関しては時間配分の点で改善の余地がありそうだったが、子どもたちが日本の文化に触れ、楽しんだり、真剣に活動に取り組んだりする姿を見て国際交流の楽しさを実感した。授業後は、子どもたちと一緒に給食を食べた。ベトナムでは学校で給食があるのは珍しいようで、お盆が日本の給食で使われているものと同じだったのでなつかしさを感じた。献立は、パクチーのスープ、もやしのナムル、カレー風味の煮物、ゆで卵、白ご飯、スイカだった。味も少し日本によっていて

すごく食べやすかった。給食を食べながら授業中にはできなかった雑談を子どもたちとできて楽しかった。会話は簡単な英語と日本語を混ぜながらしたので本当に伝えたいことを言いきれないことにもどかしさを感じることもあったが、言語の壁を越えて楽しく交流できた今回の経験が、今後私が外国の人と出会うときに積極的に話しかけられる勇気になると思うので今日感じたことは忘れないようにしたいと思った。

(紙飛行機を作る児童)



3月8日

菊川千帆

今日は、朝6時半に朝食を食べ、8時にホテルを出発した。今日は国際女性デーで、案内をしてくださっているホアイさんに花束のプレゼントをした。道でも沢山花が売られており、花を買ってバイクに乗っている男性が多く見られた。また、日本では見られない道路沿いでの結婚式を見た。道で結婚式をするということに驚いたが、白を基調とし、ピンクや赤などの色鮮やかな花がたくさん飾ってあってとても綺麗だった。

午前中は Le Loi 中学校へ行った。中学校に入ると中庭でバトミントンやお話をしている子どもが沢山いた。部屋へ入るとベトナムの伝統的な踊りや歌の披露で歓迎してくれた。ベトナムの伝統的な衣装である「アオザイ」を着ていて、葉で作る伝統的な笠「ノンラー」を使った踊りをしてくれた。ノンラーをかぶっている人は街中でもよく見られ、日よけ対策として昔から活躍している帽子である。Le Loi 中学校ではお互いの国のお菓子を作って振舞う食文化の交流を行った。ベトナムは餅に砂糖が入っている伝統お菓子だった。一口サイズで食べやすく、見た目は白玉のような感じだった。日本は「どら焼き」を作った。ベトナムの中学生は、「初めて食べたけど、おいしい!」や「ドラえもんのお菓子だね!」と言っていた。日本の和菓子はベトナムの人の口に合うとともに、日本のアニメはベトナムでも人気ということを実感した。

午後は「ハノイ国家大学」の大学生とワークショップを行った。ベトナム国家大学の学生はベトナムの伝統的な遊びを紹介してくれた。私たちは実際に①「O AN QUAN」(オー・アン・クアン)と②「THAY DA」をした。両方の遊びに共通して石を使った。私たちはボーリングや輪投げ、割りばし鉄砲など屋台をモチーフにした交流を行った。日本の遊びにみんな興味津々でとても盛り上がった。ハノイ国家大学の学生は日本語の勉強を行っているため、とても日本語が上手で円滑なコミュニケーションを行うことができた。「いつか日本にいきたい!」と言ってくれた学生が多くとても嬉しかった。

夜ご飯はホテルから徒歩1分の手作り春巻きと鍋のお店に行った。ベトナムの鍋は周りに溝のようなものが付いていて、中心でお肉や海鮮、その側で野菜に火を通すという鍋が主流であった。春巻きも自分で

作り、好きな食材を入れてオリジナル春巻きを作ることができてとても楽しかった。国際女性デーということで店員さんが、全員にプリンをプレゼントしてくれて幸せだった。

食後はホテルに戻って明日の日程の確認を行った。一日を通して、食文化や伝統的な遊びなど、文化を通して交流することができ、とても良い学びになった。明日のワークショップも学びあるものにしたい。

(どら焼きを作る様子)



3月9日

奥田真優

今日は、午前中にベトナム最古の大学跡、タンロン王城遺跡に行った。午後は、Riki 日本語センターでの交流会後、民族博物館に行った。ベトナム最終日ということで、夜はホアイさん、ツイさんも一緒に食事をした。

まず、ベトナム最古の大学跡である文廟は、孔子を祀っており、孔子は学問の神様であることから、現地のベトナム人は合格祈願に訪れる観光スポットであった。今の大学とは雰囲気は全く違っていた。また、中にはユネスコの世界記憶遺産に登録された石碑(亀)があり、亀の背中には科挙の合格者の名前と出身地が刻まれているようだ。

次にタンロン王朝遺跡は、ベトナムの世界遺産に登録されていて、中国やフランスとの闘いの跡が残されている。昔は今の10倍以上の広さがあったようだが、今では、皇帝の宮殿が建っていた中心部周辺のみが残されている。

Riki 日本語センターには、社会人の生徒も高校生の生徒もいて、幅広い年代の方々が日本語を学んでいた。日本語を学ぶきっかけは様々で、将来、日本語教師になりたい方や過去に日本との関わりがあった方、日本への留学経験がある方などがいたが、いずれも日本に好印象がある方が大半を占めていた。全体的に、やはり日本アニメの影響が強く感じられた。

ベトナム民族博物館では、館内の民族衣装やベトナムの暮らしを見て感じる事ができた。館内だけでなく、野外展示場も設置されており、部族の民家に実際に入ることもできる。どの部族の民家にも、家と地面に高さがあり、それは、動物が簡単に入れないようにするため、湿気を防ぐため、という理由があった。更には、一家族一つの家ではなく、第3世代、第4世代までの親族全員で一つの家で生活することに驚いた。

ベトナム最終日を終えて、初日とはベトナムに対する印象が大きく変わった。一見知らずうちにステレオタイプを持ってしまいがちだが、実際の体験、経験から、ベトナムには多くの日本について学べる施設があること、外国人に対して優しい人が多いこと、日本とは違った国の良さを生活を通して感じる事ができること、など大切な事を学ぶことができた。最後には、5日間私たちをサポートしてくださったホアイさん、トウイさんに感謝の気持ちを込めて色紙をプレゼントし、素敵な出会いができたことを改めて感じた。

(文廟)



3月9日

江本蘭生

前日にナイトマーケットに行き夜更かしをしたせいで、寝坊して朝ごはんを食べ損ねた。

まず、世界遺産のタンロン遺跡を見に行った。城の正門に辿り着くまでの道に赤と黄の提灯がたくさんぶら下がっていてとても映えていた。歩くこと約5分で遺跡に着き、そこで集合写真を撮ってから遺跡内に入った。城内には遺跡がよく見えるように地面がガラス張りになっている箇所があり、その地面を歩いた先に撮影スポットがあったので私も撮ろうとしたら地面に“Please don't step on the glass floor.”と書いてあったので諦めたが、他の国の観光客はズカズカとガラスの床を歩いて笑ってしまった。蓮の花が何個も置かれた傾斜が急な階段を登り城の頂上で遺跡全体を眺めた。眺めていると大勢の子どもが城の入り口にいたため私たちが手を振ると子どもたちは手を振りかえしてくれ、とても嬉しい気持ちになった。遺跡の地下には戦争の際に軍が戦争会議をしていた場所や会議の際に用いた地図など様々なものが置いてあった。

昼は、ベトナムのブンチャーと呼ばれる焼肉のような物を食べた。感動する美味しさだった。

昼食後は日本語学校に行きベトナムの同い年くらいの学生と交流をした。この交流会では日本人である私たちと現地の学生の共通する点と違う点を話し合い国際交流を深めた。

その後、ベトナム民族学博物館を訪れ、ベトナムの昔の人がどんな家に住みどんな生活をしていたかを実際の住居を見て知ることができた。また、彫刻や様々な置物があったのでそれと同じポーズや表情をして写真を撮ることに熱中していたため、内容についてはあまり学べなかった。

夜ご飯はベトナム最後の夜ということでミシュランのお店に行った。とてもおしゃれなお店で料理も全て美味しく最高の夜になった。

(タンロン王城跡の風景)



3月10日

吉村日和

この日はベトナムの出国日で、朝ホテルで塩パンとチョコパン、バナナ、ミルクをもらってバスに乗り、ラオスへ行くために空港へ向かった。空港での手続きをしていると、ベトナムでお世話になった通訳の方がお見送りに来てくださり、みんなで感謝を伝えて飛行機に乗った。

ラオスの首都ヴィエンチャンに着いたら、まずはお昼ご飯で「カオソーイ」という麺を食べた。幅広の米麺、肉みそ、芋などが入っており、トッピングとしてインゲン、もやし、ライム、レタス、エビ味噌、ピーナッツと豆腐の味噌が盛られたお皿が出てきた。初めてのラオスでのご飯だったため、食べることができるか不安だったが、とてもおいしかった。

次に、COPE ビジターセンターを訪れた。ラオスはたくさんの空爆を受けた国である。ここは、不発弾の恐ろしさを伝え、不発弾事故で手足などを失ったラオスの人々の生活を支える

義手や義足を展示している資料館だった。ラオスには1975年までのベトナム戦争中に200万トン以上の爆弾が投下され、最後の爆弾が投下されてから40年以上たった今でも農家の方や子どもたちが気付かず触れてしまっただけがを負ったり、亡くなってしまったりという被害が出ていることが分かった。不発弾による犠牲者はベトナム終戦後に約2万人もいるそうだ。館内に入るとすぐに、米爆撃機から投じられたクラスター爆弾の親爆弾から空中に散布された子爆弾の展示があった。また、不発弾で手足を失ったラオス人の生活を支えるために使われた義手や義足などが展示され、不発弾や地雷などの被害の恐ろしさを感じた。資料館の一角に義足体験ができる場所があった。義足をつけて階段を上り下りしたり、不安定な所を歩いてみたが、自由がきかずとても難しかった。

夕食まで少し時間があつたため、ホテルの近くのスターバックスに行った。スターバックスの店員さんは、とても愛想がよく、日本語をしゃべることができる店員さんもいた。飲み物は期間限定の商品以外は日本のメニューとほぼ同じだったが、フードのメニューが日本とは全然違っていておもしろかった。物価が安い
ため、お手頃価格でスターバックスを楽しむことができた。

夜ご飯は「Kualao Restaurant」というレストランに行った。日本の過去の総理大臣も何人か訪れたことのあるお店だそうで、写真が飾ってあつた。そこで初めて「カオニャオ」というラオスの主食である竹籠に入ったもち米を食べた。見た目は日本の赤飯のようだった。カオニャオは、お米を素手で一つかみ取り軽く握って、おかずを乗せたり、スープにつけたりして食べるそうで、素手でお米に触ることに抵抗があつたけど、異文化を体験している感じがして楽しかった。そしてこのカオニャオはもちもちしていてとてもおいしかった。食べている間中、ずっとラオスの伝統楽器を使った演奏を聞いたり、伝統的な踊りを見ることができた。私達日本人のために「さくら」や「上を向いて歩こう」の演奏もしてくださり、その時はみんなで演奏に合わせて大合唱して、とても楽しい時間を過ごすことができた。



3月11日

石部百音

本日は朝 7:00 にホテルで朝食を済ませラオス日本センターへ向かった。ラオス日本センターにつくと、私たちと同じ年代の学生が出迎えてくれた。歓迎の言葉を受けた後、日本のポップカルチャーの紹介があった。そのなかにハイキューというアニメがあったがラオスの学生の中にもハイキューについて知っている人がいたので、アニメは日本の文化としてラオスでも有名だということに驚いた。続いて、ラオス側のワークショップで、ラオス語を教えてもらった。簡単な単語と書き方を習ったが、ラオス語は書くのも発音するのもとても難しかった。しかし、現地の人と現地の言葉で会話することはラオスの言葉について理解できた気がして楽しかった。続いて日本のワークショップで日本の伝統的な遊びの体験を行った。ラオスの学生たちはとても楽しんでいる様子だったので日本の遊びについて紹介できて良かったと思う。

また、現地の学生の方は、フレンドリーで日本語を上手に話されていた。インスタグラムも交換してラオスに友達が出来てとても良い交流ができた。

昼食は日本料理のレストランで食べた。私は、鮭の照り焼き定食を注文した。鮭のほかにご飯とみそ汁がついてきた。ラオスで食べる日本料理は少々不安だったが、鮭もみそ汁もとてもおいしく、徐々に日本料理を食べることができ懐かしい気持ちになった。またそのレストランではバスクチーズケーキが売られていてあまりにもおいしそうだったので別で頼んで食べてしまった。

次にホアイホン職業訓練所において女性が機を織っているところや染色をしている様子を見学した。丁寧に作業しておられたのが印象的だったが外での見学は暑すぎてすぐにばててしまった。それに比べ、ラオスの人たちはこの暑さのなかでも平気で作業をしておられてタフだなと思った。

続いて、ラオス国立博物館を見学した。山口県出身の JICA の方に展示品をラオスの歴史と共に説明していただいた。現在のラオスがどのようにして出来上がったのか、興味深い話を聞くことができた。特にラオスの国境がメコン川をはさんでタイと隣り合っている経緯は島国である日本にとってありえない話だったので印象的だった。

ホテルに帰り休憩をした後、夕食を食べに行った。メコン川沿いにあるおしゃれなレストランだった。料理もちろんおいしかったが、料理と一緒に飲んだ Beer Lao がとてもおいしかった。最後に Laodi というラム酒のお店に行った。人生初のラム酒だった。2 種類のラム酒を飲んだがうめのラム酒のほうが飲みやすくとても気に入った。また学生でわいわい楽しみながら飲んでその雰囲気も楽しく良い思い出になった。朝からとても長い一日で、疲れもどっと出たが、ラオスの生活や文化に触れることができてとても充実した一日だった。



3 月 12 日

神田梨々花

今日は朝 5 時に起床し、まず「ドンカムサン教員養成学校の算数の授業見学」に行った。JICA のプログラムを利用し、ラオスの子どもたちへの授業を行ったり、大学生に指導方法を教えたりなどの活動を行っている方にお会いでき、様々なお話を聞くことができた。その話の中で、「日本の教育現場での疑問点が多くあり、海外の教育現場はどのような感じであるのか興味をもち JICA に応募した」とおっしゃっていた。日本の教育はどのような感じなのか自分の目で見た後に、海外の教育をさらに発展させていこうとしている点がすごいなと考えた。

また、ドンカムサン教員養成課程学校では小学 2 年生の授業を見ることができた。ラオスの小学校に訪れる前にベトナムの日本人学校の授業を見ることができたが、授業を受ける雰囲気が全く違って驚いた。ラオスの小学校は、日本の授業とよく似ており発表の時間を用いており、グループでの活動も授業の中に用いられていた。授業を受けている子どもたち全員から「学びたい」という気持ちが伝わった。日本よりも環境や、使用している教材も整っているわけではなかったが、いまあるモノで最大限の教育を子どもたちに受けてもらっていて、ラオスの教育に魅力を感じた。

つぎに「JICA のビエンチャン事務所」に訪問した。これまで JICA という言葉を多く聞いたことがあり、「JICA=教育」というイメージが強かったが教育の分野だけではなく、資源やエネルギーの問題や栄養改善という問題にも解決のために取り組んでいるということを知った。JICA にはいろいろなプログラムが存在しており、ラオスという小さな国にも JICA の協力隊として活躍している人たちがたくさんいるのだなと考えた。

夕食では、ラオスの伝統的なダンスを見ながら食事をするのができた。日本では見る事ができないダンスとおいしい食事を楽しむ事ができた。

この1日は実際に「JICA」について知ることができた1日となった。日本だけでなく、世界に目を向けて将来について考えるのもいいなと考えた。



3月13日

三船愛貴

今日は7時からホテルで朝食をとり、9時にホテルを出発した。

今日のメイン活動は市内の中学校での交流会(授業)で、ノンボン中学校とピアワット中学校の2つのグループに分かれて授業を行った。私はノンボン中学校の担当だった。中学校に到着すると、子どもたちが花道を作って歓迎してくれただけでなく、花飾りを首にかけてくれて、現地の方々の粋な計らいに感動した。ノンボン中学校は教員33名、学生845名の大きな学校であり歴史もある学校である。2016年から中学校で日本語勉強をスタートし現在までに320名の学生が日本語を学習している。具体的に日本の文化や、料理などを学び、以前も日本学生との交流会として文化交流等を行ったと仰っていた。日本はラオスのインフラ事業等に対して協賛しており、校舎の数か所に日本とラオスの交流が分かる記念パネルのようなものが展示されていたことから、両国の関係の良さが伺えた。授業では、折り紙とけん玉を行った。折り紙では鶴を折り、けん玉では簡単な技から難しい技まで段階的に行い、どんどん子ども達が上達していく姿を見ることができた。授業の中で、ラオス日本センターとの交流会で学んだラオス語を使って子どもたちとコミュニケーションを取ることができた時はとても嬉しかった。中学校から帰る前にバスを待っている時に、休み時間に子どもたちがバレーボールをしており、混ざって一緒にバレーをした時に、言語を超えて楽しむことができるスポーツの偉大さを実感することができた。

昼食はラオス日本語センターの学生の方数名たちと一緒にスープカレーをレストランで食べた。日本で食べるものより液体感が強く味もスパイシーでとてもおいしかった。

午後からはタラートサオという現地では有名なショッピングモールのような場所へ行った。地下に布が売っており、1,2階は様々な特産品などがたくさん売られていた。中のトイレは有料でトイレトペーパーなどはなかったらしく私はトイレに行くのを断念した。

私は外に引っ付いている市場で、日本円で約70円(10,000キープ)のコーラを買い、前日のナイトマーケットで見つけることができなかった黒のビアラオTシャツも350円(50,000キープ)くらいで買うことができて大満足だった。

夕食まで時間があつたため、バスでタイとラオスの国境である橋へ向かった。国の境目で、路肩に立ってある国旗が変わっており、国境にも石碑が建ててあつた。日本の県境などと概念は似ているが、それと比べ物にならないくらい高揚感を感じることができた。

夜は屋外でラオスの焼き肉(シンダート)を食べた。ジンギスカンのような鍋で肉を焼き色々な調味料と一緒に食べた。屋外で焼き肉をすることがあまりないのでとても新鮮で楽しかったし、料理も飲み物も全て美味しかった。

翌日はナポ村という村で授業を行う予定で、ナポ村はかなり暑く相当体力を必要とするので、早めに就寝した。今日行った授業のように明日も授業がうまくいけばよいなと感じた。



3月14日



2年 松本芳奈

今日は村の小学校を訪問した。校舎はコンクリートの平屋式で3部屋に分かれており、こじんまりとした印象を持った。今回の授業は外で行った。へそ飛行機・けん玉・だるまさんが転んだをした。どれも村の小学生に好評で楽しそうにしている姿に心がほっこりした。昼食は村の方が調理してくださった料理を食べた。また、運気を上げる儀式を体験させていただき、腕がミサングでいっぱいになった。夕食はカンダさんが経営するホテルのビーチサイドでフランス料理とワインをいただいた。人生でこれ以上良いところで夕食を食べることは無いかもしれないためかみしめながら楽しんだ。





3月15日

深井悠楽

11日目はタート・ルアン寺院に訪れた。この日はとても暑く、3月であることを忘れるような猛暑日だった。

タート・ルアン寺院は、ビエンチャンにあるラオスを代表する寺院の一つであり、ランサーン王国のセーティラート王によって再建された。実際に寺院の中にはセーティラート王の銅像があり、写真スポットとなっている。このセーティラート王という人物は、ラオスの首都をルアンパバーンから現在のビエンチャンに移した王であり、ラオスの歴史においても重要な人物である。私たちがガイドのトゥックさんの説明を受けながら、セーティラート王の銅像や寺院の中を回った。トゥックさんから受けた説明の中で特に印象に残っていることは、寺院の回り方についての話である。ラオスでは、寺院を回るとき必ず時計回りに回らなければならないという決まりがあるのだそうだ。反時計回りに回るのは葬式の時のみである。日本にも多くの寺があるが、ラオスの仏教と日本の仏教では全く別物ということを改めて感じた。他にも、寺院のいたるところに咲いているチャンパーという花について説明を受けた。チャンパーとは、仏教とともにスリランカから持ち込まれた宗教にまつわる花で、ラオスの国花にもされているそうだ。

その後、パトゥーサイに訪れて記念撮影をした。パトゥーサイとは、ラオスの凱旋門のことであり、沢山の観光客でにぎわっていた。近づいてみるととても大きく、迫力があつた。

この日を通して、ラオスの寺院や歴史について学ぶことができた。



3月16日

池田海夏人

今日は日本へ帰国する日で、ハノイ空港で帰りの便を待機した。ハノイ空港での待機時間はおよそ四時間であった。待機時間は自由行動でそれぞれ休憩する人や夜ご飯を食べる人、お見上げを購入する人がいた。私も空港でベトナムのお見上げをいくつか購入した。その際に日本円が使えることに大変驚いた。

最終日ということもあり、研修生は皆疲れがたまっているように見え、咳をする研修生や寝込んでいる研修生もいた。飛行機に乗ると帰国する実感がさらに高まり、安心感とさみしい気持ちが入り混じって複雑な感覚だった。飛行機ではほとんどの研修生が寝ており、起きて気が付けば福岡空港に到着する時間になっていた。福岡空港に到着すると一気に緊張が解け、疲れが一気に体を襲ってきた。福岡空港で解散後、私は空港内のコンビニでお茶を買いすぐに飲んだ。その時ようやく日本に帰ってきた感じがして無事に帰国できてよかったと思った。今回の海外研修は現地の人々とのかかわりや観光地巡り、学校での授業などを行い非常に内容の濃いものであったため約2週間があっという間に過ぎた感覚だった。

参加者名簿

学年	選修	氏名	Name
3	国際理解教育	石部 百音	Ishibe Mone
3	国際理解教育	江本 蘭生	Emoto Ramu
3	国際理解教育	大国 礼	Oguni Aya
3	国際理解教育	大前 愛	Ohmae Ai
3	国際理解教育	金井 瑞	Kanai Mizuki
3	国際理解教育	三上 ふた葉	Mikami Futaba
3	国際理解教育	三船 愛貴	Mifune Manaki
3	国際理解教育	吉村 日和	Yoshimura Hiyori
3	小学校総合	後藤 利奈	Goto Rina

3	小学校総合	靱光 祥希	Tomomitsu Shoki
3	教育学	伊藤 実夏	Ito Minatsu
3	情報教育	中村 千紘	Nakamura Chihiro
3	英語教育	山下 幸輝	Yamashita Kouki
2	国際理解教育	荒川 友花	Arakawa Yuka
2	国際理解教育	池田 海夏人	Ikeda Minato
2	国際理解教育	奥田 真優	Okuta Mayu
2	国際理解教育	神田 梨々花	Kanda Ririka
2	国際理解教育	菊川 千帆	Kikukawa Chiho
2	国際理解教育	深井 悠楽	Fukai Yura
2	国際理解教育	松本 芳奈	Matsumoto Hana
2	国際理解教育	宮本 美咲	Miyamoto Misaaki
2	国際理解教育	吉武 夢昂	Yoshitake Yugo
2	理科教育	藤本 優風	Fujimoto Yuna
2	小学校総合	濱田 満菜実	Hamada Manami
教員	国際理解教育	森 朋也	Mori Tomoya
教員	国際理解教育	セネック アンドリュー	SENNECK ANDREW

編集後記

コロナ渦のため、近年国際体験実習は行われていなかったが、2024 年の 3 月に再びこの実習が再開しそれに参加できたことをとてもうれしく思っている。

ベトナム・ラオスに訪れるだけではなく、その国の人々や現地で働いている日本人の方と関わることができとても充実した実習となった。また、たくさんの日本と異なる文化や習慣に出会ったが、日本との共通点・自分との共通点を見つけることが何よりも国際理解教育では必要なことではないかと思った。

このような貴重な機会を作ってくださった先生方、現地の関係者の方、ともに学び合った国際体験実習のメンバーに心から感謝を申し上げる。

大国 礼

アジア圏の旅は初めてだったため、旅の準備を行う上で楽しみよりも不安が上回っていたが、無事に研修旅行を終えることができた。途中参加だった私を温かく迎え入れてくれた先生方や仲間にとっても感謝している。

ベトナムやラオスがどのような国か、今まで触れる機会が無かったため、とても貴重な経験となった。この研修旅行を通して多くのことを学び、視野が広がったと感じる。様々な事柄について日本と比較することによって、各国の良さが見えてくると感じた。個人的に一番印象に残っているのは、日本がいかに清潔な国なのかということだ。環境や衛生管理の重要性を理解することができ、とても良い経験になったと思う。

このような貴重な機会をいただき、この国際体験実習で関わった先生方をはじめとする、仲間やすべての人に感謝を申し上げる。教師となった際、多様性や異文化理解の視点を踏まえた考え方を大切に、グローバル人材の育成に尽力していきたいと考えている。

後藤 利奈

海外を初めて経験した私だったが、日本から出ることによって全く違う世界があることに驚きと、刺激を感じた。文化、言語、食、人など何もかもが違う世界で、戸惑いを感じることもあった。しかし、志の高い仲間たちと、何事にも全力で挑戦したことが何よりも自分たちの一生の財産になるとともに、後輩、先輩問わず絆を深めることができたと思う。

このような素晴らしい経験をしたことで、私はオーストラリアにワーキングホリデーに行くことを決意することができた。ベトナム・ラオスでは、異文化理解についてだけでなく、他国での教育の違いについても学ぶことができた。この経験から、日本の教育と海外の教育を比較すること、また、様々な国に行くことのよさについて、子どもたちに教えていけるように、充実したワーキングホリデーにしたい。しかし、この度は、仲間がいない中での挑戦であるため、この海外研修で得た勇気、経験から、何事にも挑戦していきたいと思う。

このような機会を作っていただいた方々への感謝を忘れず、これからも日々学んでいきたい。

鞘光 祥希

今回の研修旅行は、異文化理解において大切なことは何か、自分なりの答えを得ることが出来た素晴らしい経験となった。

私は、3年間国際理解教育を学んできたが、国際理解教育及び異文化理解には何が大切でどのように子供たちと学んでいけばよいのか分からなかった。今回の実習では、言語や文化が全く異なる人々と2週間余り共に過ごし、様々な価値観に触れた。食事一つとっても、私たちが見慣れたものや食べなれた味とはかけ離れたものが多かった。当たり前が当たり前ではなく、あって当然のものが無い生活に、不安は大きかった。しかし、それらを楽しむ気持ちを持っていれば、文化や言語が異なっても、他人を思い遣る気持ちは変わらないということに気づくことができた。

この経験は、これから行う異文化理解教育において非常に大切なものとなった。まず相手の文化や言語を尊重し、相手の文化を一度受け容れてみる。すると、人々の持つ温かい気持ちに気づき、その文化にもっと親しみを持つようになる。そしていつの間にか相手の言語で挨拶をしてみたり、相手の文化について調べて質問したりするようになる。すると、相手も心を開いてくれるようになる。

これからの社会は多文化共生社会であり、異文化理解教育は必要不可欠である。だからこそ、相手の文化を尊重し、受け容れる姿勢を持つことの大切さを子供たちに教えていきたい。そうすれば、異文化交流のすばらしさや面白さに気づき、世界で活躍できる人材の育成につながるだろう。何より、文化の違いは非常に面白いものであることや、世界には素晴らしい心を持った人々がたくさんいるのだということを、

実感を伴って伝えることができる。今回の研修は、私のこの大きな学びと感動が少しでも伝わるよう、丁寧に編集に取り組んだ。いつか、この報告書を読んだ人が、海外で人の優しさに接し、異文化理解における異文化尊重と受容の大切さを再認識してくれることを祈っている。

最後に、この研修に携わったすべての方々、支えてくれた先生方へ深く感謝したい。この研修では、一人も犯罪に巻き込まれることや、食あたりをすることなく、日本に帰ってくることが出来た。それらは全て先生方や大学の方々、ガイドをしてくれた現地の方々の徹底した準備と支援のおかげである。貴重な経験をさせていただけたことへの感謝とともに、編集後記を終える。

三上 ふた葉

